

崇元寺跡

— 範圍確認発掘調査概報 —

1983年3月

沖縄県那覇市教育委員会

発刊にあたって

本報告書は、国・県の補助と指導をいただき実施した崇元寺跡範囲確認発掘調査の結果をまとめたものであります。調査が無事に完了し、報告できましたことは当事者として意義深いものがあります。

崇元寺は中世に創建された琉球国の国廟で、主な建造物は日本と中国の建築手法を基礎に開花した琉球建築で、昭和 8 年に国宝に指定されましたが第 2 次世界大戦で木造の家屋はすべて焼失しました。

調査の結果、正廟と東庁、西庁の遺構の保存状況が当初に予想した以上に良好であることが確認されました。また、全体の配置は日本の寺院とは異なり中国式の配置であるということも窺っています。このことから発掘調査で確認された遺構について那覇市は元より我国の歴史と文化を知る貴重な文化遺産であり大切に保存し活用を図る必要があります。

最後に調査に快く御協力をいただきました関係者各位に深く感謝申し上げます。

昭和 58 年 3 月 28 日

那覇市教育委員会

教育長 伊波 静 男

例 言

1. 本報告書は崇元寺跡に児童公園の整備計画が予定されたため、遺構の保存状況と範囲を確認するために文化庁と沖縄県の補助を受けて沖縄県教育委員会の指導のもとに実施した発掘調査の結果である。
2. 発掘調査は昭和57年9月16日から10月12日まで実施し、その後、昭和58年3月まで、出土遺物の整理作業と聴き取り調査及び報告書の作成作業を行なった。
3. 調査について次の方々の御協力をいただいた。
 - (1) 焼失前の崇元寺について
真栄平房敬（那覇市文化財調査審議委員）
平良 良信（那覇市PTA連合会常務理事）
 - (2) 出土古銭の同定
嵩元政秀（興南高等学校教諭）
 - (3) 石材の同定
大城逸朗（県立博物館学芸員）
4. 本報告書に使用されている2万5千分の1の地形図の国土基本図は国土地理院発行の地図、都市図は那覇市が昭和52年1月に作製した那覇市現況図（5百分の1）を複製したものである。
5. 図版3 焼失前の崇元寺正廟の写真は県立博物館蔵の鎌倉芳太郎写真資料を複写したものである。
6. 図版4 崇元寺跡周辺空中写真は国土地理院の昭和52年12月撮影1万分の1を複製したものである。
7. 資料の整理、実測は大田宏好、平良真博、写真撮影は仲地洋があたった。執筆は次のとおりである。

第I章	仲地 洋
第II章	”
第III章	大田宏好
第IV章	
1. 遺構	上原 静
2. 遺物	1～7.9.10.大田宏好、8.上原 静
第V章	上原 静
8. 焼失前の崇元寺について詳細に記憶している真栄平房敬氏にその状況の執筆を依頼し、まとめることが出来た。ここに併せて掲載することにした。
9. 調査組織は次のとおりである。

調査主体	那覇市教育委員会
調査責任者	伊波 静男（教育長）
調査事務局	金城 幸明（社会教育課長） 山内昌志郎（社会教育課文化係長） 仲地 洋（社会教育課文化係主事）
発掘調査員	上原 静（沖縄県教育庁文化課専門員）
調査補助員	大田宏好（沖縄考古学会会員）

目 次

I 章	概 況	7
II 章	調 査 に 至 る 経 緯	7
III 章	調 査 の 経 過	10
IV 章	調 査 成 果	10
	1. 遺 構	10
	(正廟跡・東庁跡・西庁跡・前堂跡)	
	2. 遺 物	12
	(①青磁器、②染付磁器、③磁器片加工品、④青銅製品、 ⑤古銭、⑥埴、⑦有孔円盤状製品、⑧瓦、⑨鉄製品、⑩礎石)	
V 章	ま と め	28
	崇元寺について	29



発掘された正廟の遺構



図版 1

近景
- 1 -

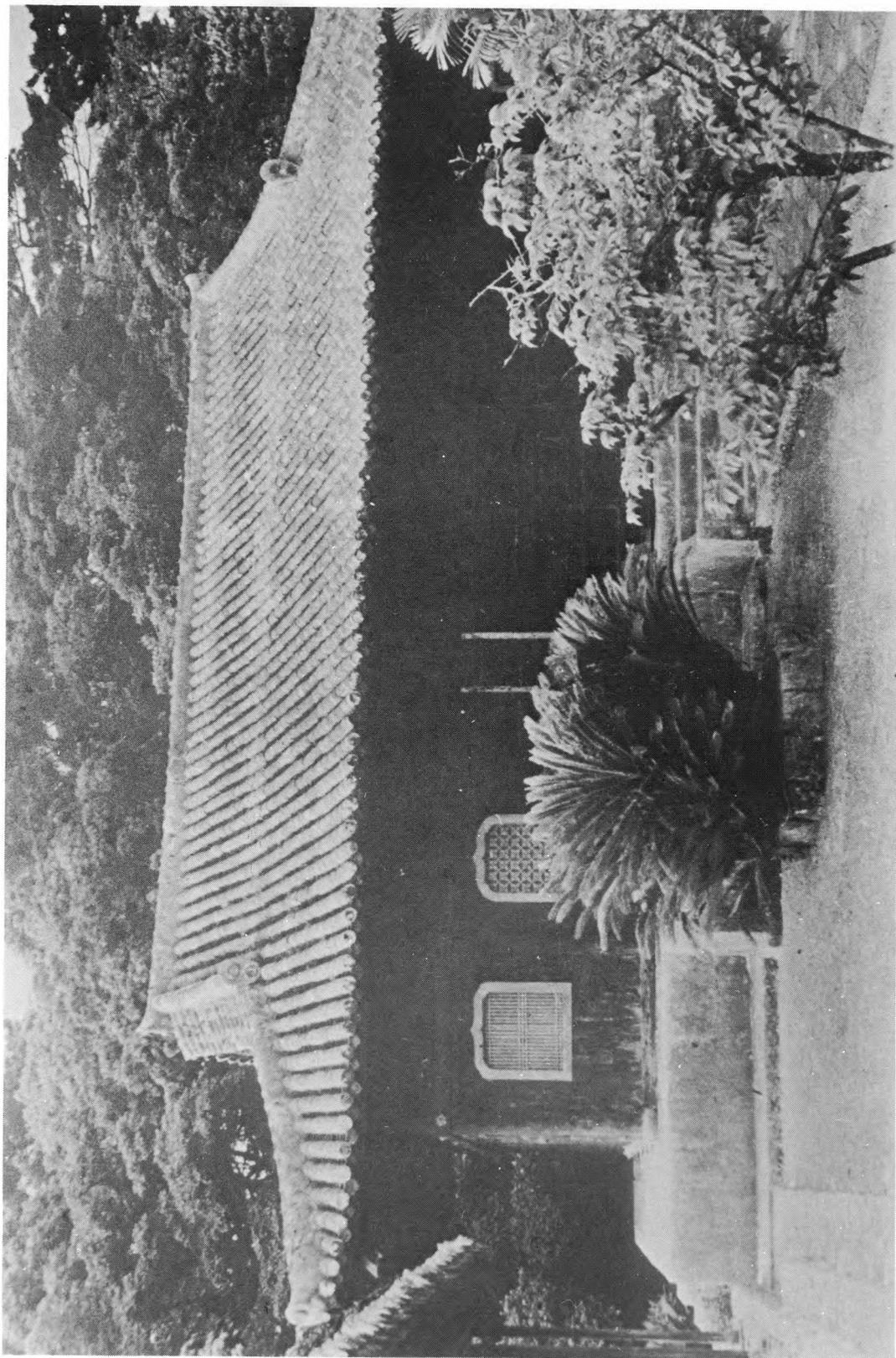


発掘調査が進む崇元寺跡



図版 2

遺構を見学する市民



焼失前の崇元寺正廟

図版 3

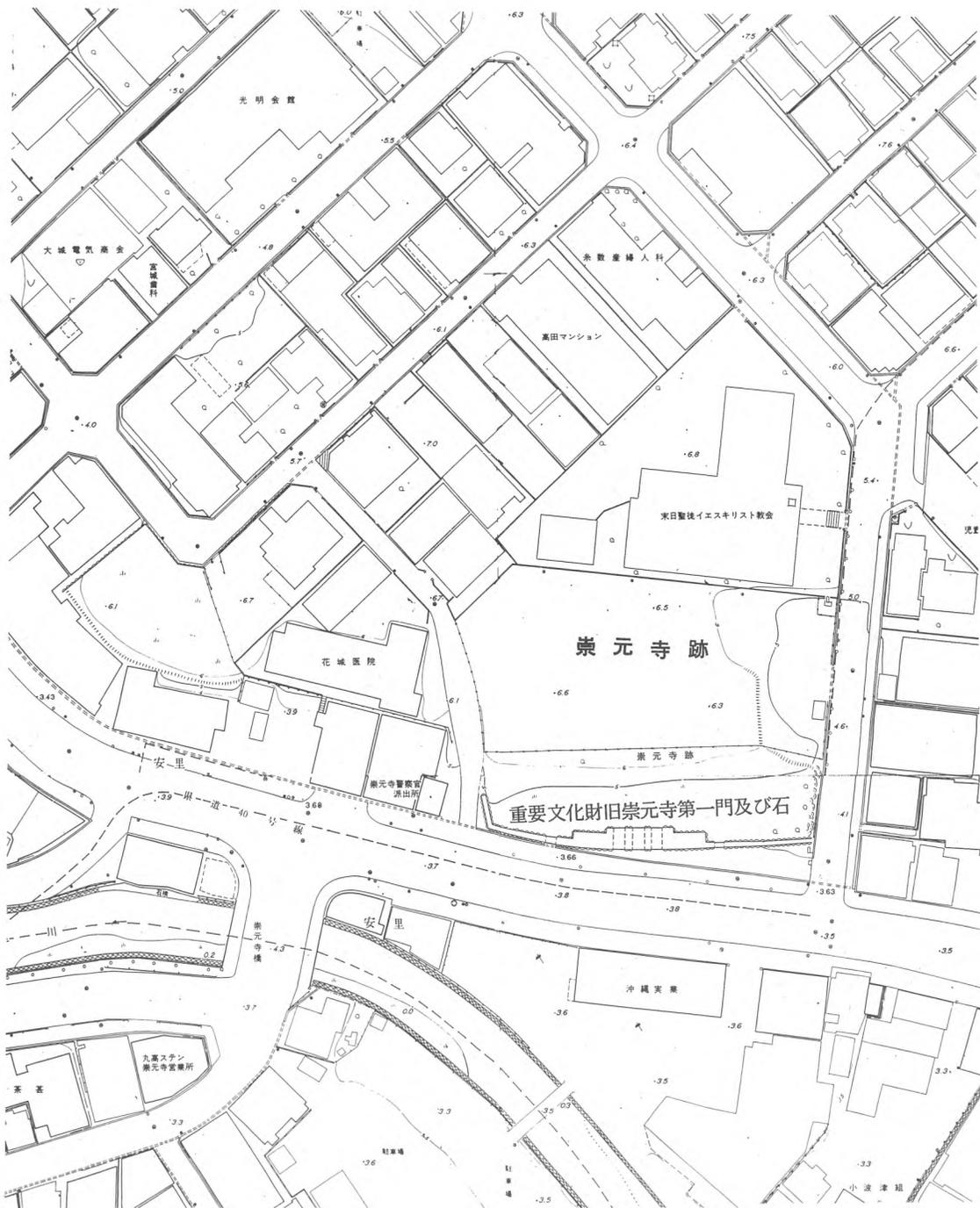


図版4

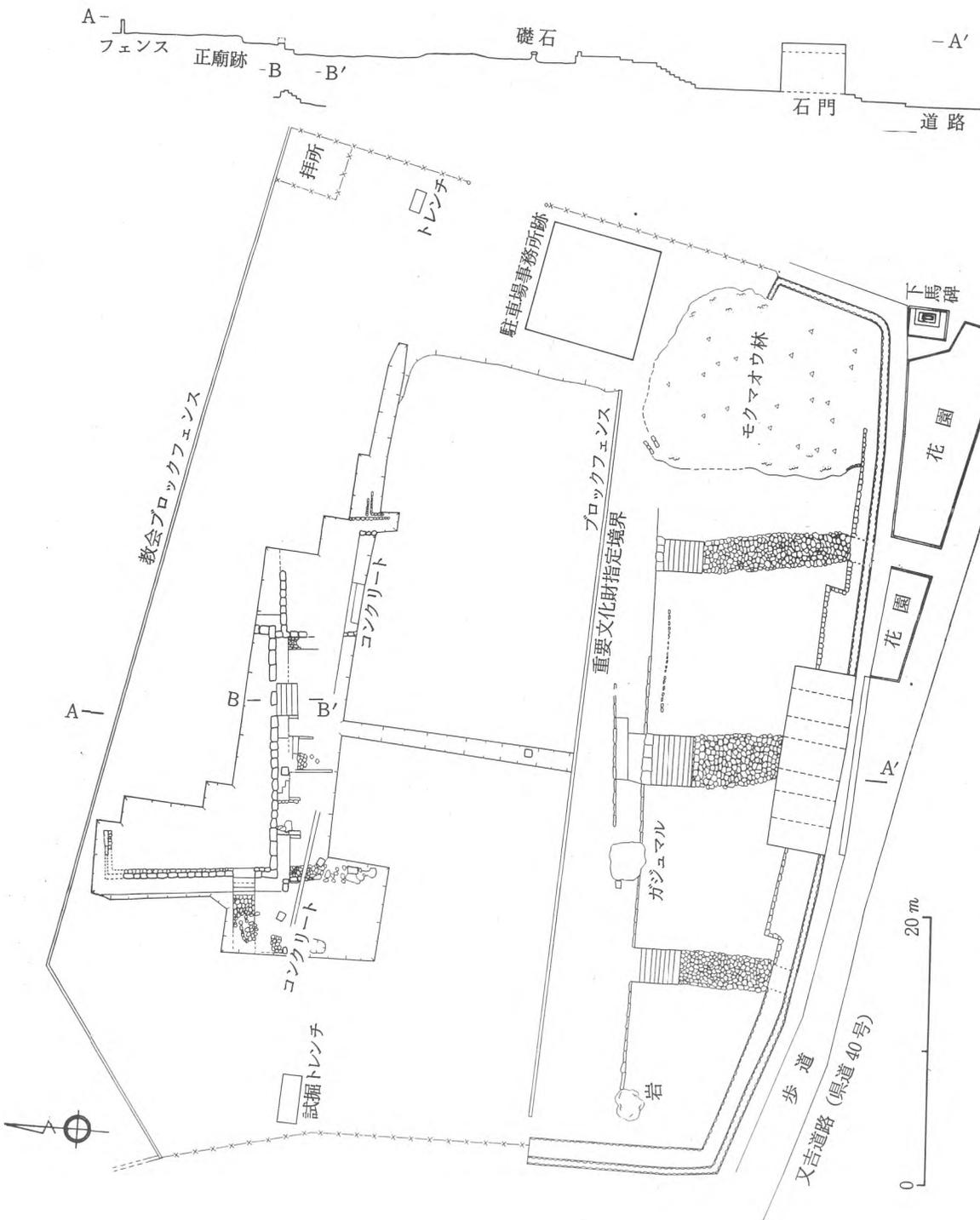
崇元寺跡周辺空中写真(昭和52年12月撮影1万分の1)



第1図 崇元寺跡の位置図



第2図 崇元寺跡周辺（都市図）



第3図 崇元寺石門と発掘調査区平面図

I 概 況

崇元寺は安里の西はずれ、泊高橋に向う手前に所在し、その前側を安里川が流れている。崇元寺は本来、安里に属していたが、後に泊の発展に伴ない泊に組み入れられたと伝えられ、付近を脇泊と称していた頃もある。

地形は島尻層郡を母体とする地質が浦添市に接する銘苅あたりから起伏に富んでおり、安里川沿の崇元寺の一带は随所に琉球石灰岩が露頭し、崇元寺の東側の一部も石粉山^{いしご-やま}として掘採され、現在では下馬碑の側がわずかに面影を残している。

往古の時代から交通の要所で、特に那覇港方面へ向う長虹隄は、崇元寺橋を起点として海中に浮ぶ島々に掛けられた用路であり、中国からの時の使者、冊封使もこの道を通り、崇元寺で先王諭祭の義式を行なった後、首里城へ登城した。近年になって、大正11年に崇元寺の前の通りに嘉手納線の鉄道が開通し、安里駅が出来ると崇元寺通りは商店等が軒を並べ、門前町としてにぎわいを呈した。

沖縄戦において、那覇の町と同様に焼け野原と化したのが、戦後の復興は目覚しく、崇元寺跡の周囲は市街と化した。

崇元寺は霊徳山と号し、臨済宗に属していたが、元来琉球中山王統の廟所であり、舜天王以下歴代の王の神位が祀られていた。創建については、尚巴志代(1422～1439年)とも、尚円代(1470～1476年)または、尚真代(1478～1526年)とも伝えられ明らかでない。しかし、門前に建つ下馬碑に1527年7月25日の表記があり、この年は尚清が王に即位した年であり、これ以前に崇元寺が創建されたことが窺える。

焼失前の崇元寺の主要配家屋の配置は、石門をくぐり抜け、石段を上がると、前堂があり、前堂から中庭にかこまれた博敷きの甬道をつき進むと正廟に至る。正廟の東に庫裏があり、ここには仏像があり地域の方が崇元寺の寺と俗称していた。その前方には国王の控え所の東庁があり、これと相対して西側に王妃の控え所の西庁があり、その北側には調理場の神厨があった。

なお、戦前の崇元寺の姿が記録されたものに、田辺泰工学博士の琉球建築がある。

II 調査に至る経過

崇元寺は昭和8年1月23日に国宝に指定されたが、沖縄戦で木造建築物はすべて焼失した。しかし、石造の第一門及び石牆と東側の下馬碑損傷は受けたが戦禍をくぐり抜け残存したものを昭和26年に第一門及び石牆の修復が行なわれ、昭和30年琉球政府特別重要文化財に指定された。那覇市は昭和31年に崇元寺公園に指定し、将来の公園整備計画に向けて跡地利用の規制を行なった。

焼け野原と化した崇元寺跡は戦後、一時は米国軍隊の兵舎が建ち、その後農林局関係の庁舎、琉米文化会館、駐車場と利用されてきた。石門側は早期に文化財として対処したお蔭で地割の変動はなかったが、前堂跡より正廟跡にかけては戦後の土地利用により遺構の保存状況を窺うこともできない程に客土がなされていた。

昭和55年に那覇市が児童公園用地として崇元寺跡を買収し、昭和56年度に同整備計画が予定されたが、市役所と市教育委員会の協議の結果、崇元寺跡において公園整備工事の前に、遺構の保存状況と範囲確認発掘調査の必要性についての理解の元に調査が実施されることになった。

第三章 調査経過

発掘調査は1982年9月16日～10月12日までの21日間実施した。発掘地区は最近まで駐車場として使用されており、そのためコーラルが敷きつめられて当時の遺構の状況が不明確であった。そこで『琉球建築』（註1）に掲載されている建物の配置図を参考にして発掘を行うことにした。まず、石門から前堂跡に上がる石段に前堂及び正廟が直面していることに注目し、石段の中央線上に南北、これと交差して発掘予定地の中央部から東西のトレンチを設定した。最初に、前堂跡から幅2mで北側へ20m掘り進んだ。その後、東西に発掘を進めたところ東側と西側に敷石遺構の一部が確認できた。しかし、両方の遺構の広がりを追うには発掘作業員及び時間的にも余裕がないため主として西側の敷石遺構の広がりを確認することにした。また並行して東西の範囲をおさえるため東側に1×1.7m、西側に1.5×3.5mの試掘を行なった。その結果、東側は既に削除され浅い表土の下に石灰岩の風化物の地山が確認され西側は攪乱をうけているため遺構は発見できなかった。今回の調査において正廟の正面と西側の基壇と石段、正廟と東庁、神厨、西庁の連絡路の敷石の遺構が確認され、10月7日～17日まで崇元寺跡の平面図と遺構の実測、写真撮影を行ない、その後、焼失直前までのことの聴き取り調査を実施して、遺構を埋め戻して全作業を修了した。

第四章 調査成果

1. 遺構

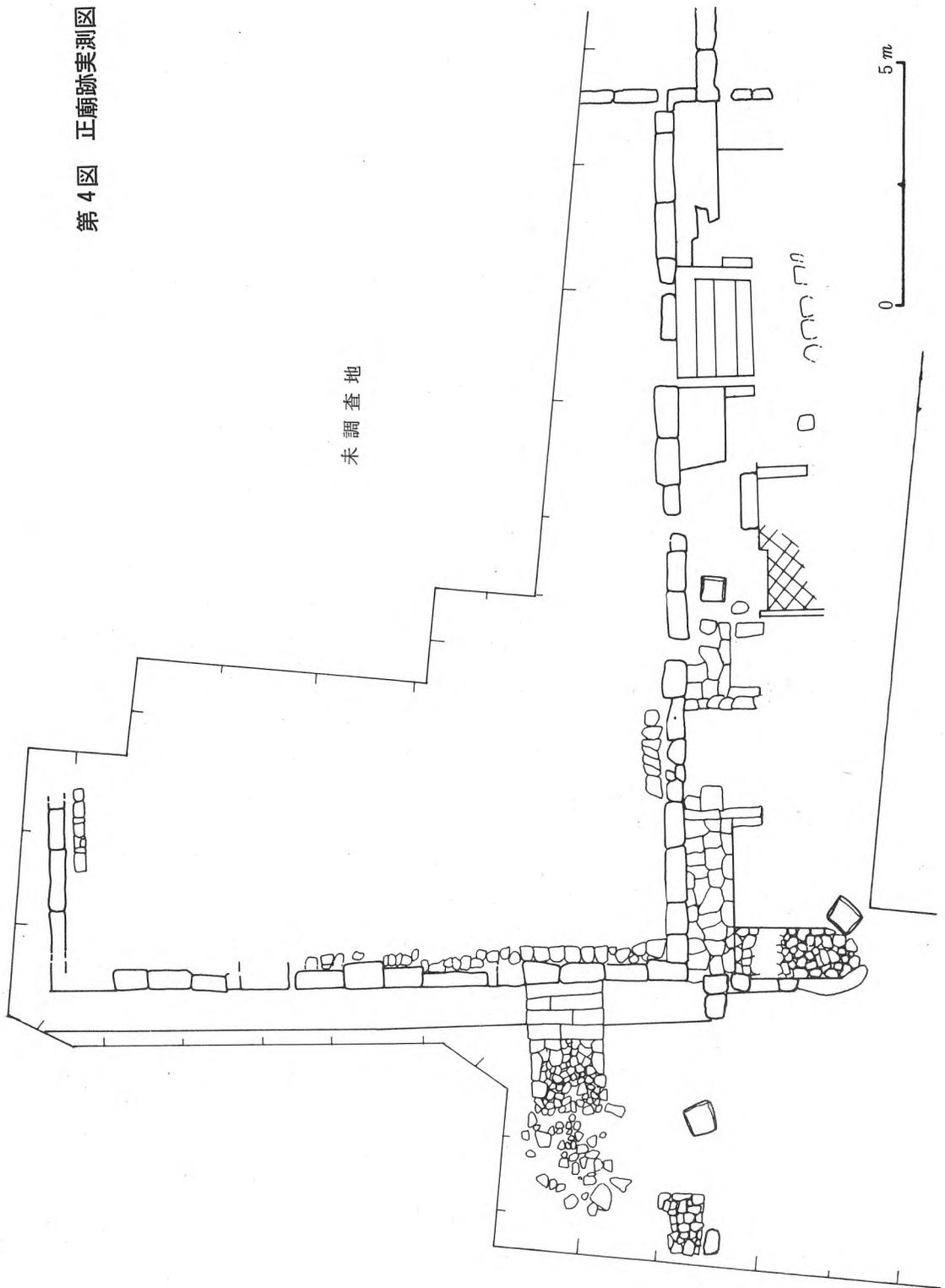
東西、南北に交差する二本のトレンチを入れることで、三基の建物遺構とそれに属する諸遺構を確認することが出来た。(第3.4図) 遺構は瓦礫とコーラル混じりの土層(最も厚い南側で88cm、北側の薄い所で30cm)に被覆されていた。戦火で焼失し、瓦礫の山と化した家屋跡は戦後の跡地利用の整地や構築物の基礎工事によって破壊に至ったが、整地が正廟の地盤高に基準がおかれたため当初の予想以上に保存状況が良好で、戦災前の写真及び建物配置平面図からも現況は合致するものである。以下、確認された遺構について記述する。

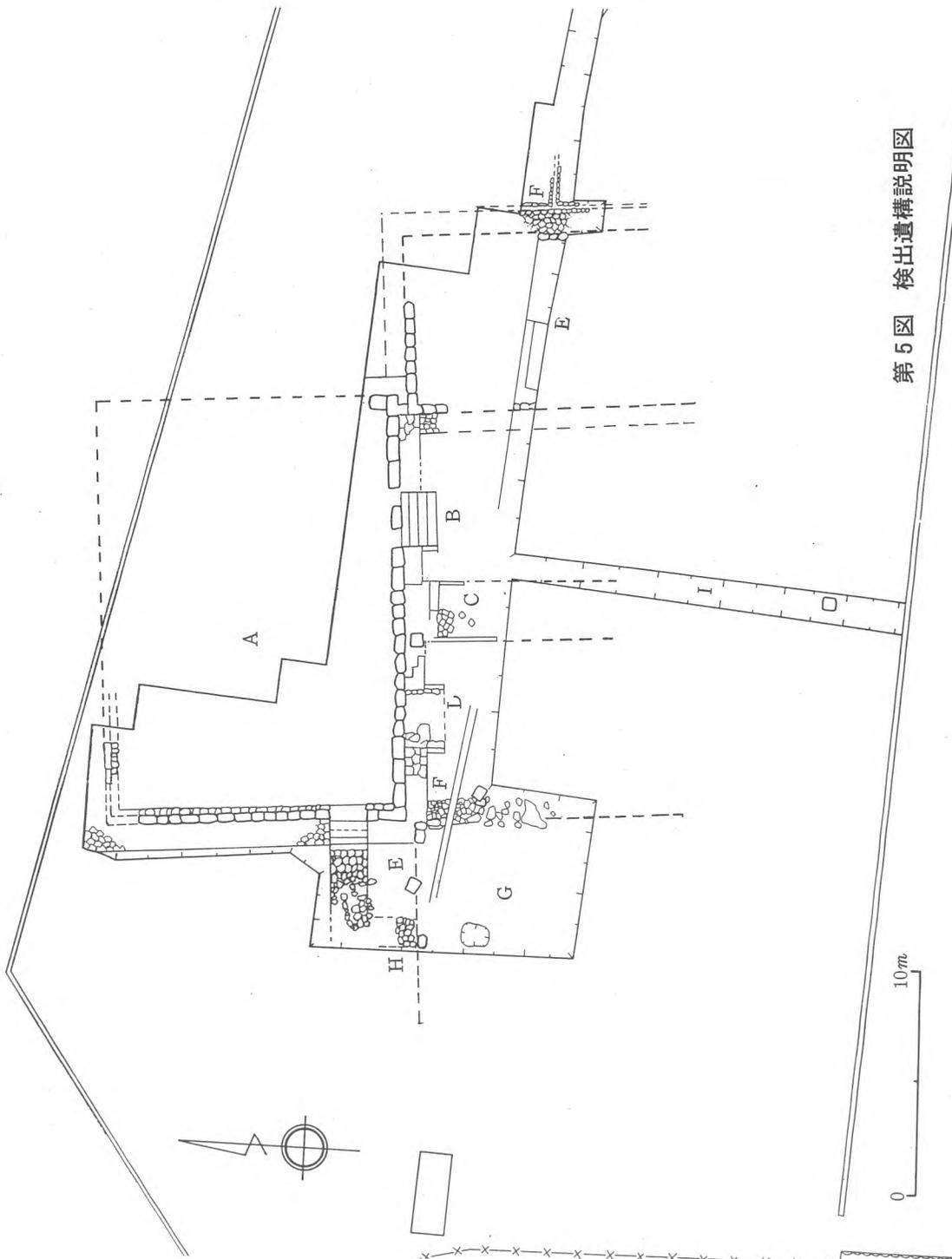
正廟跡(第5図A)

正廟の基壇の南辺から西辺をめぐり一部北側隅を明らかにすることが出来た。当遺構は犬走の敷石と切り石二段積の基壇からなる。基壇の規模は東西18.25cm×南北13.20cmで高さ80cm(畳石より)である。基壇の保存状況としては、南北側は破壊が著しく犬走までおよび、基壇の切り石も下部のもののみ残し、基壇内は整地され赤色土が露呈し当時の埦敷の土間は既に破壊されていた。東辺側は、炭化物が最も多く認められたところで、積石面も火熱により橙褐～赤褐色をおびている。石積は南辺に比べ保存が良く、当初の二段積が明確に残されている。

階段は4基のうち形状を留むものは二基である。正廟正面に三基附されるがそれらの右側のもは(第5図B)4段の段石からなり、最下段のものを残して上部はコンクリートが覆せられ、戦後に二次使用がなされている。中央階段に相当する部分(同図C)は損壊が著しく、その前庭部に前堂から伸びる埦敷の角道の一部が残されている。埦は四半敷である。左階段は階段石が抜きさられ、わずかに両脇の耳石の基礎を残す。西側の階段は、4段の階段石を有するものである。本階段は正廟正面、三基の階段の様な耳石は附されていない。これより西方には神厨への連絡路の敷石遺構の

第4図 正廟跡実測図





第5図 検出遺構説明図

大半が破壊されている。(同図 E) 石敷連絡路は正廟の南西隅から西庁へ伸びているのが確認できた。敷石の石の大きさは10～20 cm台のもので、犬走のものが30～40 cmの大きさが採用されている。素材は石灰岩を主とするが、中にはサンゴ塊も使用されている。又、連絡路と犬走の接続では約1 cm、犬走が高くなっている。特徴的な点として後世のものと思われるが、切り石や敷石の継目に補修のための、シッキ、セメントが施されている。

東庁跡 (第5図 E)

正廟跡の南東隅に接して検出されたもので、北辺と北西隅、及び東辺の一部を明らかにした。火災のため橙～赤褐色を呈した一段のみの基壇からなるが、正廟のごとく基壇の外側を敷石の犬走が廻されている。規模は未発掘地も多く実測はされないが、露出した各北、東西辺の基壇の推定線を測ると東西8 m×南北13 mになる。本遺構の東側には石敷に沿って幅約20 cmの溝が東方へ伸びている。遺構内部は基壇直上レベルまで攪乱され、一部は戦後のコンクリート基礎の打設のため深く掘削されている。

西庁跡 (第5図 G)

本遺構は正廟の南西部に接合するように確認されたものである。正廟南西隅の犬走に接続して当該遺構の基壇と犬走が存在し西方と南方へ伸びている。当遺構の北辺の基壇はほとんど抜きさられ、わずかに、同辺に接続する(同図 E) 石敷連絡路側に残されている。この辺側には東庁の様な基壇をめぐる犬走はみられない。当遺構の東辺は、北東隅から約25 mのあたりから基壇が南側につき出すようになるが、破損が著しく石面が明確ではない。文献、琉球建築の写真より判断すると正廟西面の階段の取り付け部分に相当する。遺構内部は削平され、地山の赤土が露出。

前堂跡 (第5図 I)

当遺構跡と目された部分にトレンチを入れた結果、地表下1.5 m最も深く掘削がなされた地域で、トレンチに沿いわずかに北側に盛り上がった黄褐色の細かい土層が認められた以外、基壇、敷石等遺構と全体の広がりを確認することが出来なかった。

2. 遺物

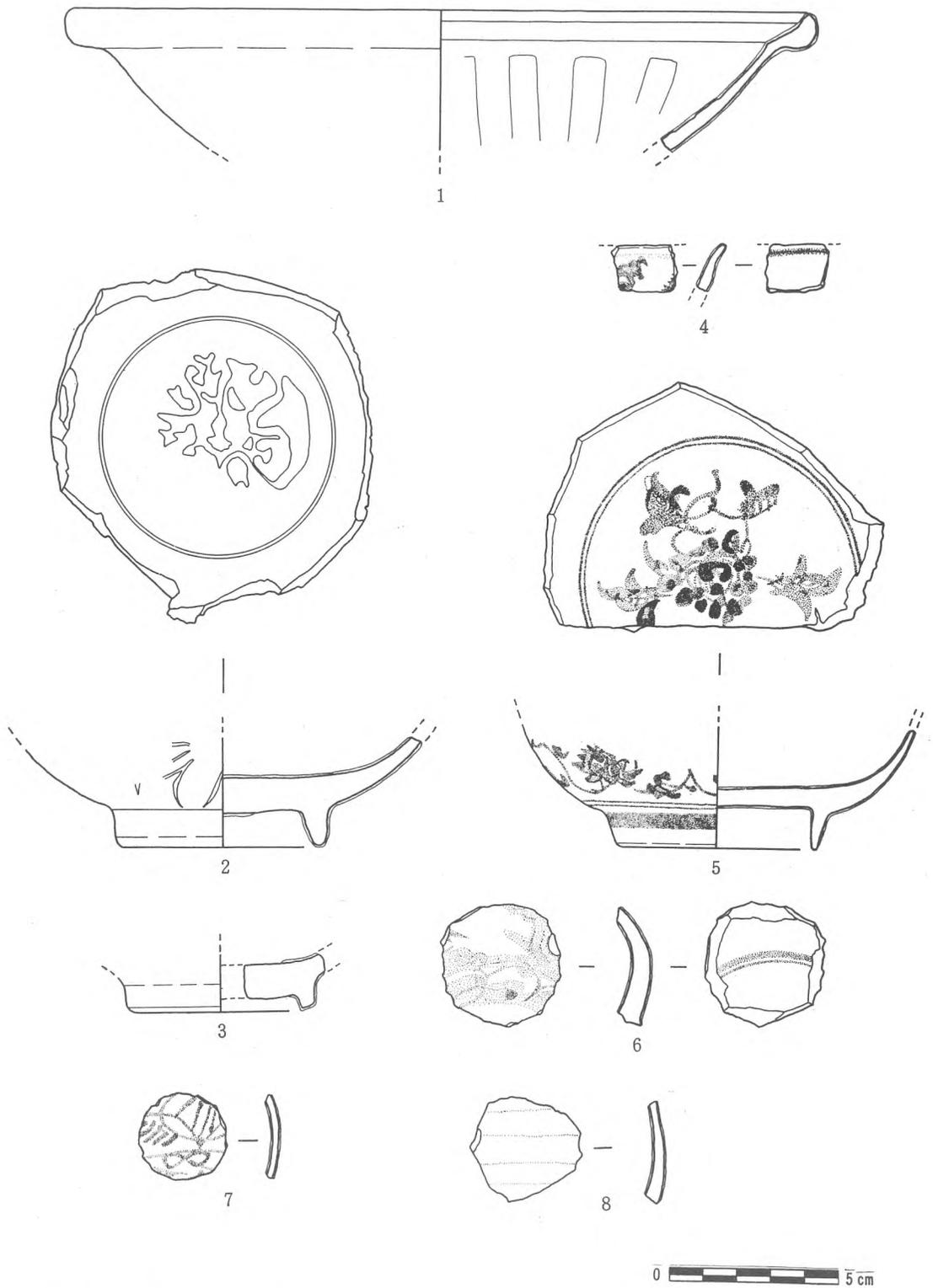
今回の発掘調査によって青磁器、染付磁器、磁器製品、青銅製品、古銭、埴、有孔円盤製品、瓦、鉄製品、角釘、礎石が得られた。以下、これらの遺物について記述する。

1. 青磁器

口縁部1点、座部2点が得られた。

第5図1は盤の口縁部破片で、口径は推算で22.4 cmを測る。口縁は玉縁状をなし、内面には幅9 mmの掘り込みによる連弁が見られる。釉は緑色を呈し、細かい貫入が入っている。器厚は3.5～6 mm。

同図2は低部の破片で底径は推算で6.2 cmを測る。見込みに円圈状の沈線とその内側にスタンプ



第6図 青磁・染付・磁器製品実測図

を施し、外面にも文様の一部が見られる。畳付は丸味を帯び、高台脇の裏側まで施釉されている。また高台裏にはトキンがあり、その部分み釉がかけられている。

同3図は畳付がやや広く、見込みと高台裏が無釉になっている。釉は灰青色である。底径は推算で5.6cmを測る。

2. 染付磁器

口縁部片と高台部片の2点のみ得られた。

第6図4は微弱な外反を示す口縁部破片で碗に属すると思われる。外面には青花の一部が見られ、内面には口唇に沿って線文様が一条認められる。

同図5は見込みに2条の円線とその内側に青花が描かれている。また、外面にも同様の青花が見られ、その下に圍繞する線文様が描かれている。素地は白色を呈し、釉は透明で、細かい貫入が入っている。畳付には釉はかかってない。底径は推算で6cmを測る。

3. 磁器片加工品 (コイン状製品)

染付を素材とし円盤状に打ち欠いて加工した製品で、第6図6～8の3点が得られた。6と8は底部付近、7は胴部を利用している。7は表面に細かいキズが見られ、特に中心付近では円形状になっており、茶褐色を帯びている。出土地点は6と8が正廟西側階段付近、7は正廟南側階段付近である。

番号	長さ(cm)		器厚(mm)	重量(g)
	最小	最大		
6	3.5	3.8	4～8	12.5
7	2.6	2.6	3	3.4
8	2.8	3.4	3～4.5	5.1

4. 青銅製品

第7図1は青銅製香炉の破片で全体の形状は不明であるが頸部に近いものであろう。くびれ部分には斜め方向の雷文が一面に施されていた。また、肩部には直径1.4cmの乳が横位に2点認められ、完形品にあっては圍繞していたものと思われる。全体に青錆が固着し、裏面の一部には灰が付着している。くびれ部の径は推算で16.8cmを測る。正廟南側階段付近から出土した。

5. 古 銭

今回の調査で得られた古銭は51枚で、他に破片が18片ある。その内訳は下記のとおりである。なお、詳細については第1表に記した。

第7図2	開元通宝	1個	6	天聖元宝	2個	10	元豊通宝	4個	14	寛永通宝	2個
3	咸平元宝	1個	7	皇宗通宝	1個	11	元祐通宝	2個	15	無文銭	5個
4	祥符元宝	1個	8	嘉祐元宝	1個	12	洪武通宝	8個	16～18	不明	3個
5	天禧通宝	1個	9	熙寧元宝	1個	13	永樂通宝	18個			

6. 埴

ほぼ正方形をなすもの(方埴)と三角形をなすものがある。色調は酸化焼きのものが橙褐色、茶褐色、還元焼きのものが灰褐色を呈するものが見られる。

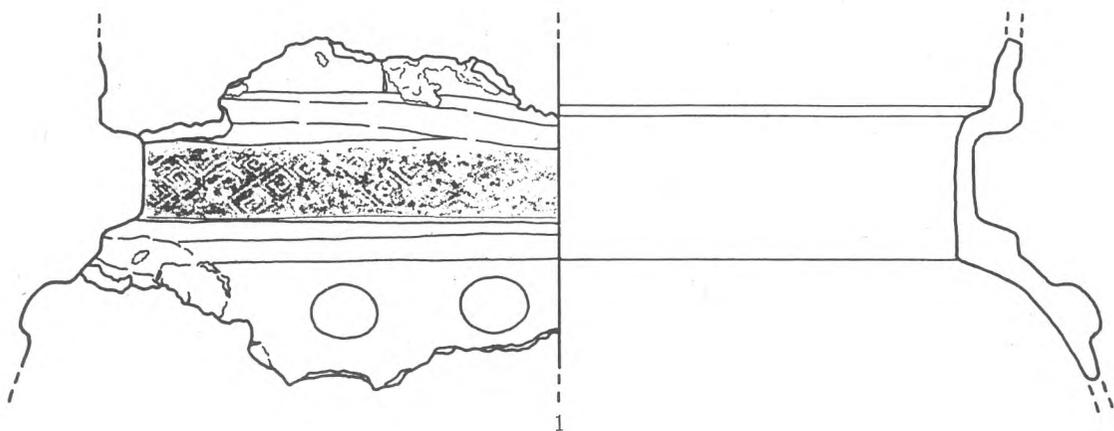
崇元寺出土古銭一覽表

第1表 古銭観察一覽

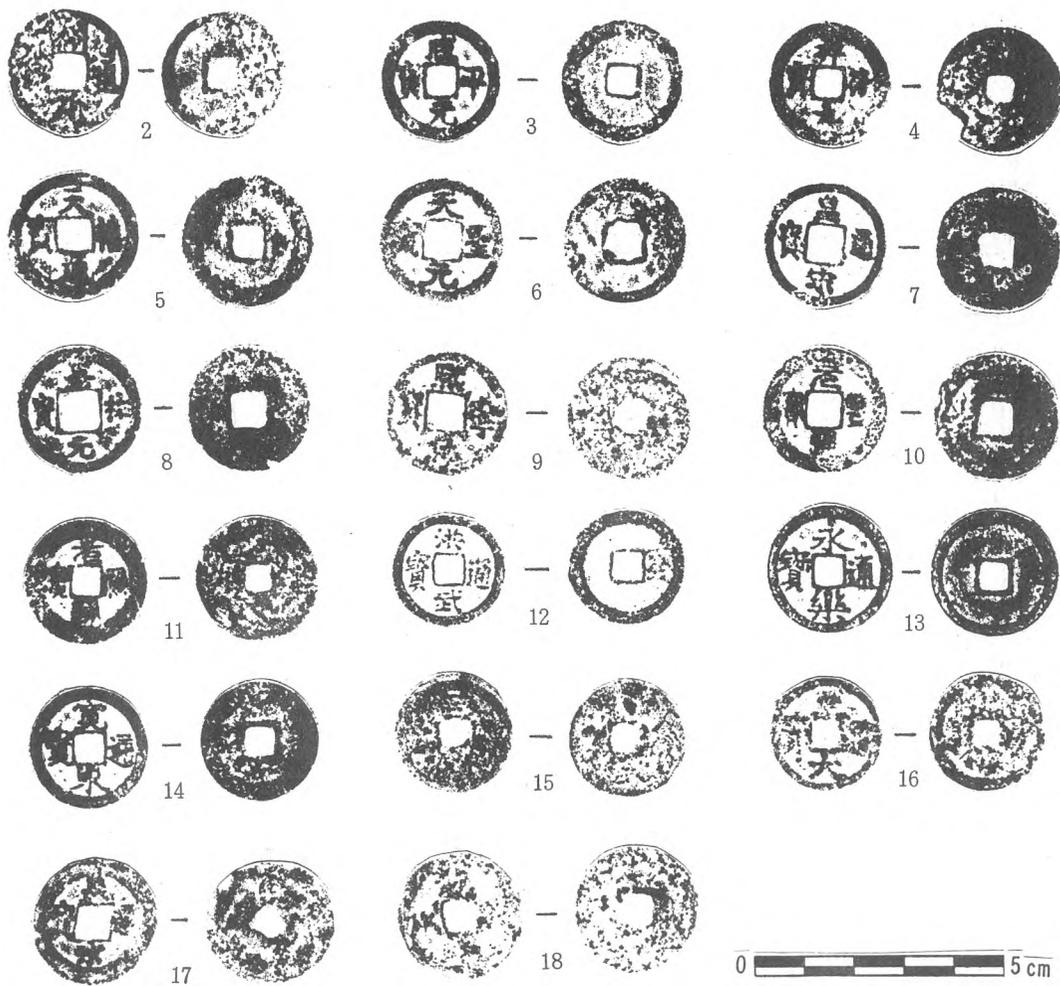
古銭名	残存径(mm)	外縁厚(mm)	残存重量(g)	初 鑄 年 代	特 徴
開元通宝	24.5	1.3	4.3	唐・高祖 621年	付着物が被っているため文字は開の一部と通のみ判読可能。裏は青錆が付着。
咸平元宝	24.2	1.5	3.6	北宋・真宗 998年	文字は磨滅している。裏は青錆が付着。
祥符元宝	25.0	1.1	3.5	“ “ 1008年	一部破損しており、破損ヶ所は青錆が付着。文字は磨滅している。
天禧通宝	26.3	1.2	3.8	“ “ 1017年	文字は磨滅している。裏は青錆が付着。
天聖元宝	25.0	1.5	3.6	“ 仁宗 1023年	文字は深い。宝の文字は付着物が被っている。裏は青錆が付着。
“	26.0	1.1	3.35	“ “ “	聖の文字は鮮明でない。裏は青錆が厚く被っている。2個に破損している。
皇宋通宝	25.0	1.1	2.8	“ “ 1039年	文は深い。文字面は薄く穴が3ヶ所あいている。
嘉祐元宝	25.0	1.5	4.15	“ “ 1056年	嘉の文字は青錆が付着。他の文字は判読できるが、宝の文字は磨滅。裏は青錆が付着。
熙寧元宝	24.5	1.8	3.9	“ 神宗 1068年	付着物が被っているが熙と寧の一部のみ確認できる。裏は青錆が付着（多い）
元豊通宝	25.0	1.5	4.0	“ “ 1078年	通宝の文字は磨滅している。裏は青錆が付着。
“	25.0	1.1	3.65	“ “ “	元・宝の文字は磨滅している。僅かに青錆が付着。
“	23.8	1.5	3.6	“ “ “	文は他の3個より深いが磨滅して判読しにくい。僅かに欠損。
“	25.2	1.2	3.55	“ “ “	文字は判読しにくい。青錆が付着。
元祐通宝	25.0	1.1	3.4	“ 哲宗 1086年	文字は判読しにくい。裏は青錆が付着。
“	24.0	1.3	3.7	“ “ “	元・祐のみ判読できる。他は付着物に被われ判読不可能。裏は青錆が付着。
洪武通宝	23.2	1.5	3.75	明 太祖 1368年	文字は深く鮮明であるが文字面は薄い。
“	23.5	1.1	3.3	“ “ “	文字は鮮明である。両面とも青錆が付着。
“	23.2	1.3	2.5	“ “ “	洪・武の文字は鮮明であるが他の2文字は付着物のため判読しにくい。両面とも青錆が付着している。
“	22.8	1.5	4.25	“ “ “	文字は深く鮮明である。宝の裏には西(?)の文字がある。両面ともわずかに青錆が付着している。
“	23.1	1.1	3.85	“ “ “	文字は深く鮮明である。両面とも青錆が付着。
“	25.0	1.3	4.35	“ “ “	文字は鮮明である。武の裏にも文字があるが判読不可能。青錆が付着。

古 鑄 名	残存径(mm)	外縁厚(mm)	残存重量(g)	初 鑄 年 代	特 徴
洪 武 通 宝	23.0	1.2	3.8	明・太祖 1368年	宝の文字以外は鮮明である。宝の裏には西の文字がある。裏面はわずかに青錆が付着。
"	24.0	1.9	3.9	" "	文字は深く鮮明である。裏面には波状の文様(?)がある。
永 樂 通 宝	25.0	1.3	3.25	明・成祖 1408年	文字は鮮明であるが文字面は薄い。通の文字に穴があいている。青錆が僅かに付着している。
"	25.2	1.3	4.1	" "	文字は鮮明である。青錆が僅かに付着。
"	25.0	1.5	3.35	" "	文字は鮮明である。青錆が付着。
"	25.2	1.5	4.0	" "	"
"	25.2	1.5	4.3	" "	文字は深く鮮明である。青錆が僅かに付着。
"	25.0	1.5	4.2	" "	文字は鮮明であるが、楽の文字に僅かに付着物がある。青錆が付着。
"	26.0	1.5	4.4	" "	永・楽の文字に付着物がある。裏は半分近く青錆が付着。
"	25.8	1.5~2.0	4.4	" "	永・通の文字は鮮明であるが、楽・宝は僅かに磨滅している。裏は青錆が付着。
"	26.0	1.8	4.0	" "	永と楽の一部のみ確認できる。通・宝は青錆が付着して判読できない。裏は青錆が付着。一部赤褐色を呈する。
"	26.0	1.5	4.65	" "	宝の文字以外は鮮明。青錆が付着。
"	25.0	1.5	4.25	" "	表面は石灰分と青錆が付着しており、永・楽の一部のみ確認できる。裏は青錆が付着。
"	26.0	1.5	4.0	" "	永の一部と通・楽が確認できるが、宝は青錆が付着。裏面は半分近く石灰分が被っている。一部欠損。一部ヒビ割れが見られる。
"	26.0	1.1	3.2	" "	表面は石灰分などが付着しており、永・楽・通の一部のみが確認できる。文字は浅い。裏面は青錆が付着。
"	26.0	1.5	4.25	" "	文字はやや深い。青錆が付着。
"	25.5	1.5	4.45	" "	文字は深く鮮明である。永の一部に付着物がある。僅かに青錆が付着。
"	25.5	1.5	4.65	" "	青錆が付着し、文字は永・楽と通の一部が確認できる。楽と宝の間に穴があいている。裏は僅かに青錆が付着。
"	25.2	1.8	3.8	" "	文字はやや深く、宝以外は鮮明である。楽と宝の文字の下に穴があいている。裏は青錆が一部付着。
"	26.0	1.8	4.5	" "	永・楽の文字は確認できるが、通・宝の文字は青錆に被われている。裏は半分近く青錆が付着。
寛 永 通 宝	24.2	1.0	2.5	江戸時代 1636年	文字は深く鮮明であるが、宝の文字は完全に石灰分に被われている。永・通は一部石灰分が付着。裏は青錆が付着。
"	24.1	1.2	2.85	" "	石灰分が付着しているため文字は鮮明でない。裏面はほぼ全体が石灰分に被われている。
"	24.5~26.2	1.1	4.0	不 明	平面観は楕円形。文字は鮮明ではなく(?)の文字が確認できる。青錆が付着している。
"	23.0~24.0	1.8	4.0	" "	付着物に被われて文字は半読困難であるが、大の文字のみ確認できる。裏は青錆と砂粒が付着している。

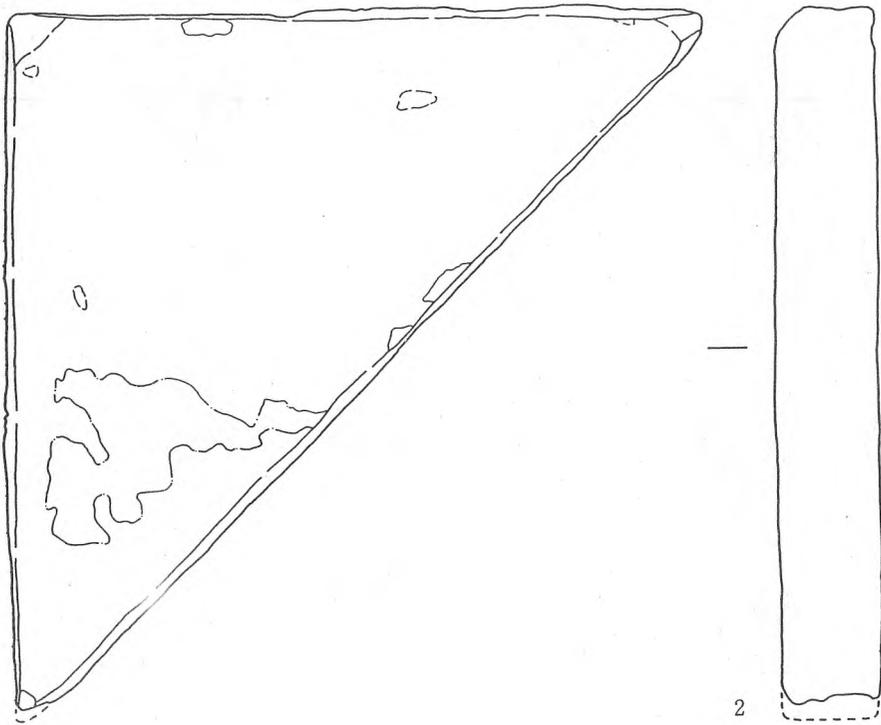
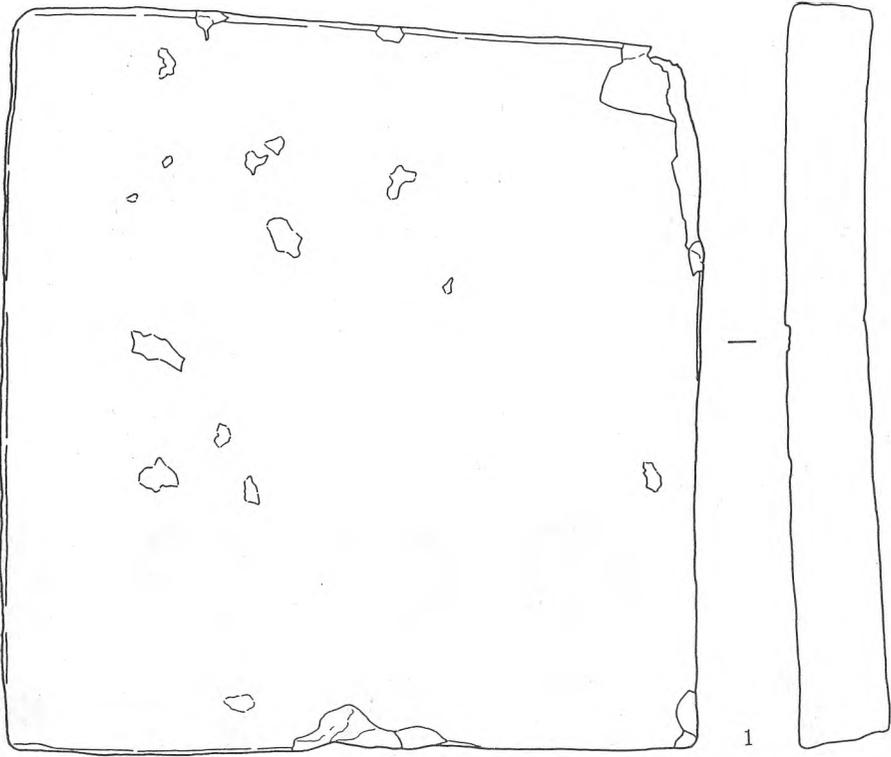
古銭名	残存径(mm)	外縁厚(mm)	残存重量(g)	初鑄年代	特	徴
	25.0	1.0	3.45	不	明	石灰分が厚く被っているため文字は判読不可能。
無文銭	23.5	1.5	3.9	"	"	両面とも石灰分が付着。
"	22.8	1.0	1.6	"	"	両面ともほぼ全体に青錆が付着。
"	23.0	1.1	2.4	"	"	両面とも石灰分が付着。
"	23.5	1.2	2.9	"	"	両面とも青錆が付着。折り曲がっている。
"	20.5	0.9	0.8	"	"	保存が悪く3個に破損。青錆が付着。
"	23.5	1.0	2.0	"	"	保存が悪く3個に破損。青錆に厚く被われている。
"	24.5	1.5	2.8	"	"	両面とも青錆が付着。一部欠損している。
	25.0	1.1	3.0	"	"	石灰分、青錆が付着しているため文字は判読できない。2個に破損している。
	25.5	1.5	3.35	"	"	付着物に厚く被われているため文字は判読不可能。一部文字の部分が欠損している。
	25.5	1.3	2.85	"	"	文字が磨滅しているため判読不可能。半分近くが欠損している。青錆が付着。
	25.5	1.3	3.1	"	"	文字は磨滅および青錆が付着して判読不可能。一部欠損している。
	-	1.5	1.4	"	"	文字は青錆が付着しているため判読不可能。半分以上が欠損している。
	-	1.2	1.1	"	"	青錆が付着しているが通の文字は確認できる。半分以上が欠損している。
	27.0	1.5	2.3	"	"	文字は磨滅および青錆が付着しているため判読不可能。半分近く欠損している。
不	-	0.8	0.65	"	"	青錆が付着している。半分以上が欠損。
"	-	1.5	1.7	"	"	青錆が厚く被っている。半分以上が欠損。



1



第7図 青銅製品実測・拓影・古銭拓影



第8図 博実測図

0 10 cm

第8図1は方埴で一辺が26cm、厚さ3.15cm、重量3.25kgを測る。表面の整形は良くなめらかであるが、裏面は雑で浅い凹凸が残っている。色調は表面では茶褐色と一部暗褐色、裏面では橙褐色を呈する。焼成は良好である。断面で見ると僅かに彎曲している。

同図2は三角形の埴で底辺の長さが35cm、他の二辺が24.5cm、厚さ4cm、重量2.2kgを測る。器面は両面ともザラザラし、表面には窪みがある。色調は両面とも橙褐色を呈する。焼成は良好である。

出土量は酸化焼きのものが約4、環元焼きのものが約1の割合で出土している。

7. 有孔円盤状製品

第9図1は環元焼きの埴を素材としてその周辺を打ち欠いて円盤状に形成したもので、車イリの車の可能性がある中央部の穿った孔は表面では直径1.5cm、裏面では1.15cmである。器の大きさは直径10.3、厚さ4.3cm、重量380gを測る。

8. 瓦

瓦は各家屋跡から出土するが、特に多く出土したのは正廟跡の西側一帯からである。その種は比較的古いと考えられている環元焼きの青灰色の瓦と、現在も製造されている酸化焼きの赤色の瓦に大別され、さらに形状から軌丸瓦、垂尖形の軒平瓦、丸瓦、平瓦からなり、前者の二つはさらに瓦当面の文様から軌丸瓦が4類に、軒平瓦が3類に分類される。文様は草花を描写したもので中央の縦線を境に左右対象を特徴とする。

- (1) 軒丸瓦
- (2) 垂尖形の軒平瓦
- (3) 丸瓦

第2表の観察表に記す。
第3表の観察表に記す。

完形品はなくいずれも破損しているが、玉縁を成形するものである。色調が青灰色のものと赤色のものがある。

第10図1は色調が灰青色をおびたもので、外周縁部に漆喰が付着している。凸面の中央はいくぶん高くなり、その面に縦位の「ナディ」によるナデ面と稜線が認められる。ただ風化が進み器面は粗れている。側面の割口は成形時の割れ面そのまま、また、玉縁の裏面には、切り込みがあるが、その面は光沢を有す。凹面には布目痕が残り、玉縁近くには指圧痕がかぶっている。

胎土には灰～茶灰色粒が混入し、包泡も比較的多く認められる。全長27.7cm（玉縁部はのぞく）厚さ1.7～2.0cm。

第9図2は赤色瓦である。器形は前述のものとはほとんど変わらず、外周縁部に漆喰の付着がみられる。凸面はやはり「ナディ」による整形がなされているが、焼成時の器面破裂のため細かい亀裂が多く、また風化著しく粗面呈す。凹面は布目痕があって、縦位方向に比較的明瞭なシワが二本、継ぐようにみられる。このシワは前述の灰色瓦にも同じ様に存在する。全長27.6cm（玉縁のぞく）厚さ1.5cm

- (4) 平瓦

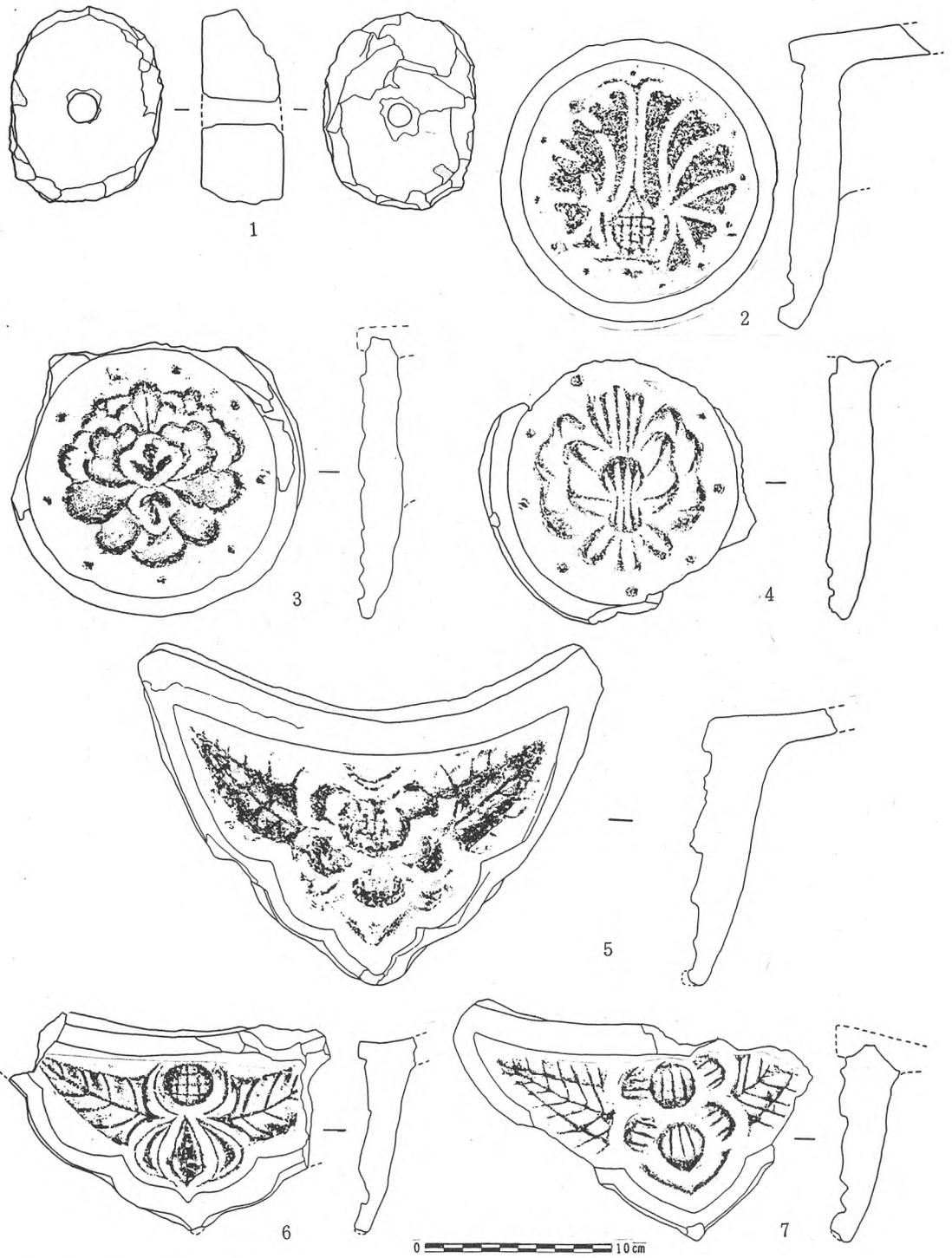
完形資料は得られていない。第10図3は灰青色に焼き上がったものである。表面に縦位方向の幅広のナデがなされているが丁寧ではなく、器面はいまだ起覆があり成形時の気包面が消さ

第2表 軒丸瓦観察表

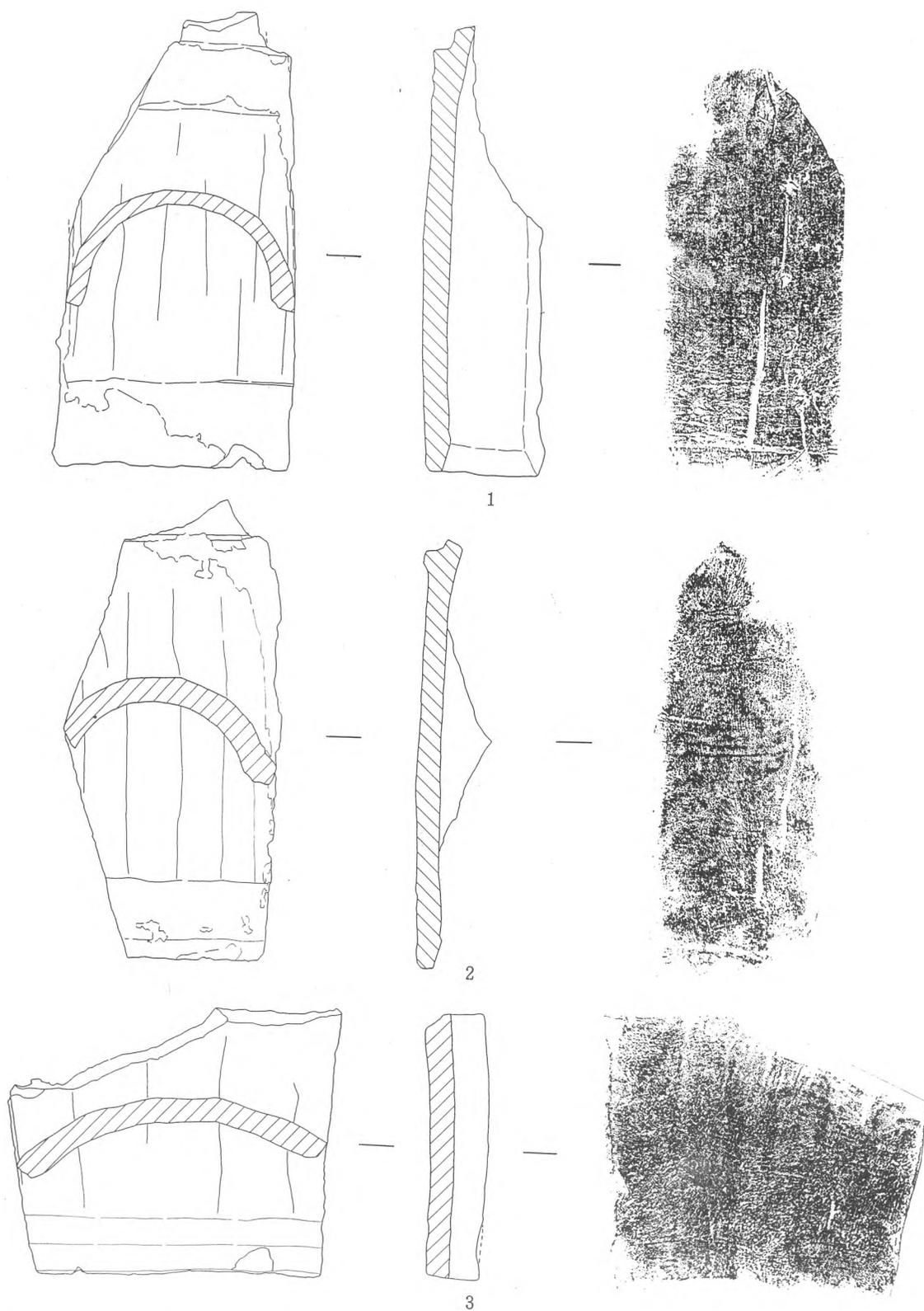
挿図、図版番号	分類	直径	内区		外区		外縁		瓦当		裏面調整	成土調 焼胎色
			径	弁区径 (縦軸)	珠文数	幅	高	瓦	面			
なし 図版 11の1	I	15.1cm	10.8cm	12 (内1コ 欠損) 径5mm	1.0～ 1.1cm	0.7～ 0.9mm	瓦	面	指のナデ、圧痕が多 く残る。 丸(筒)瓦との接合 部に粘土補強ナデ跡 明瞭。	やや軟 質 青灰色		
第9図2 図版 11の2	II	14.9cm	10.6cm	11 径4～ 5mm	0.9～ 1.0cm	0.6～ 0.8mm	瓦	面	上記と同じ花文様を施文するが、内区中央を中心に 彫りが浅く明瞭でない。焼成前の指圧痕とナデ跡が 外縁の左右にみられ、一部は内縁に達し、珠文がつ ぶされて認められない。 花弁の基部にある中房は格子文様が施され、その下 に横位の凸線と楕円形の凸文がみられる。この凸文 は珠文より少々大きくつくられている。	好 緻 橙褐色		
第9図3 図版 11の3	III	15.3cm	10.1cm	9 径7mm	0.9～ 1.0mm	0.3～ 0.5mm	瓦	面	文様面は3cmと高く鮮明。中央部の中房は上下に二 つあり、上部のもが下部に比べ高く、大きい。上部 の房には花(おしべ)が三本と先端が三つに分か れた花弁が7枚施文され、下部の房には5枚の葉が つけられている。珠文は大きく、中央軸線の下端部 のものを中心として左右対称的に配してある。ただ し間隔は一定せず。	好 緻 褐色～ 赤褐色		
第9図4 図版 11の4	IV	14.2cm	10.4cm	9 径8～ 9mm	0.9～ 1.2cm	0.4mm	瓦	面	外縁高は浅く、内区の花文が全体に浮きだしている。 したがって花文は鮮明。上記のⅢ類同様に中房は二 つに分かれ、上部が大きく、上部中房の頂部には先 端が三つに分かれた花弁に、中房同様の四本の線文 が施文されている。(花被)また、中房を中心に して左右に花文が二段に開いている。(一段のものは 花弁先端が二枚に、二段のものは三枚に分かれて みられる。) 珠文はⅢ類同様に配置されている。なお、内区の凸 面全体にわたり細かい布目痕が観察される。	好 緻 褐色～ 赤褐色		

第3表 垂尖形の軒平瓦

挿図・図版番号	分類	弦幅	弦深	瓦当厚	外縁		瓦当面		裏面調整	焼胎色	成土調
					幅	高	瓦	部			
第9図5 図版11の5	Ia	—	3.3cm	14cm	(上縁) 2.3cm	0.4 ~0.7 mm	押圧による文様は深い、文様そのものはやや不明瞭。中央に花文、その左右に葉文を配置する。花文は中房を中心に5枚の花弁とその上下にV字状の隆起線文を施す。葉文は中央部が凹み縁部向い高くなっている。葉脈は隆起文であるが、中央線が葉の縁部より低く、枝脈がそれぞれ左右に各6本外区までのびている。	中央部高まりに向かって横位、斜位のナデ痕がみられる。	やや好緻 堅淡 褐色	好緻 褐色	
第9図6 図版11の6	Ib	—	—	—	(上縁) 1.3cm (下縁) 0.7~ 1.0mm	0.4 ~0.6 mm	中央にある花文から右半部を残した軒平瓦である。文様は上記Iと同様であるが、本資料がシャープである。中房は格子目になされている。残された右側外縁から裏面一帯に漆喰が付着している。	”	良堅 褐色	好緻 褐色	
第9図7 図版11の7	II	—	—	推定 11.4 cm	(上縁) 1.6cm (下縁) 0.8cm 角が丸 味をな す	0.5 ~0.6 mm	花文の中央に房が上下にあり、上部のものは円く格子文様をつけ、下部のものは葉状に下端が尖がっている。その下方にはV字状の隆起文がある。上下の房にはそれぞれ左右から一對の花弁が施されている。また、花弁には3本の隆起線文がみられる。花文の両側にのびた葉は、きわめて鮮明で、葉脈の中央線が最も高く、それから左右に枝が外区までのびている。葉脈は左右それぞれ9本である。	平瓦との接合部には横位の指ナデ。裏面中央部には指圧痕が存在する。	良堅 黄褐色	好緻 褐色	
図版11の8	III	—	—	推定 10.3cm	(上縁) 1.0cm (下縁) 0.6 ~1.4 cm	0.3 ~0.4 cm	花文中央に上下に房有り、上は格子文様が施され円く、しかもそれを囲む隆起円圈。下は中央に楕円形とその左右に三ヶ月状の子葉が施されている。いづれも、隆起文で囲み、立体感を増している。中央花文の左右の葉は、やや平扁で、中央の葉脈と枝脈4本があるが全体に起伏が少ない。	横位の指ナデ	良堅 赤褐色	好緻 褐色	

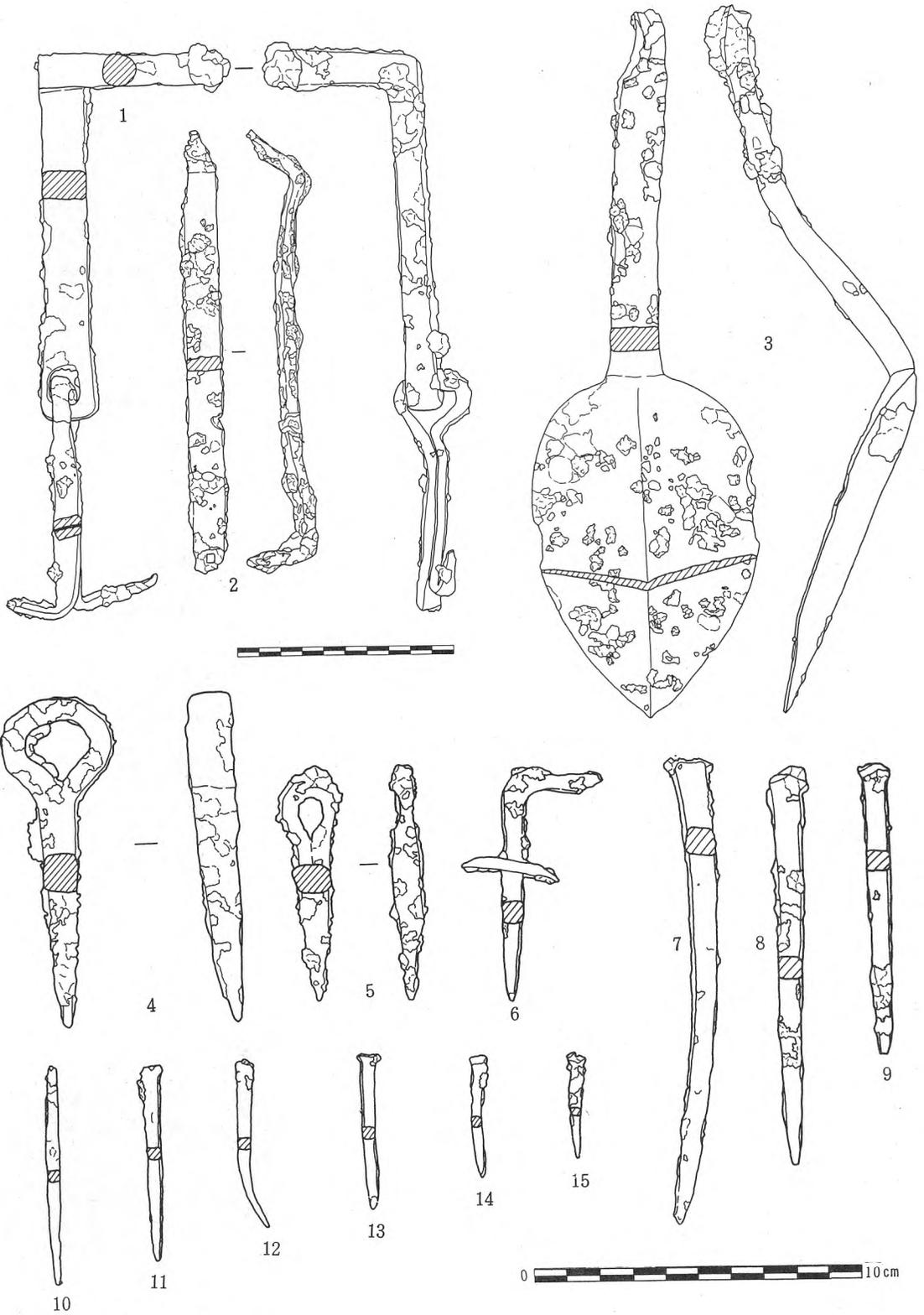


第9図 瓦実測図・拓影



0 10

第10图 丸瓦・平瓦実測、拓影



第11図 鉄製品・角釘実測図

れてない。凹面には布目痕がみられ、又約3cm幅の簾状成形具の圧痕が6条認められる。両側面とも打割面からなり何ら成形は見られない。小辺幅19.2cm、厚さ1.5～1.9cm。

9. 鉄製品

鉄製品は角釘をはじめ家屋の金具類等が多く出土したが、各々代表的なものについてのみ記述する。第11図1は扉の止め金で、打ち込んで折り曲げられた状態で出土した。接合部の穴は磨滅が進んでおり、長期間に使用されたことが頷けられる。

同図2は四角な埴である。長さ20cm、幅1.55cm、厚さ5.5cm、重量110g、今回の調査で、の出土は極めて少ない。

同図3は鋺状の形を呈したもので、聴き込み調査で扁額を固定した金具であることが判明した。刀と柄の部分から成り、刀の部分は葉状を呈し中央部からV字に折られている。その縁部は薄くなっている。1個出土した。

同図4・5は頭部が環状に成形された釘である。4は長さ10.2cm、環の最大幅3.6cm、重量80.2g。5が長さ7.3cm、環の最大幅1.8cm、重量17.6gを測る。

同図6～15は角釘で、すべて錆化が著しく大きさの判別できるものは5寸、4寸、3寸、2寸5分、2寸、1寸8分、1寸5分、1寸2分、1寸の9種のサイズがある。

釘の形態は頭部が丁字状に折り曲がったもの(同図6)、頭部も先端同様尖がったもの(同図10)が見られる。その横断面はすべて方形を呈するものである。正廟の周辺から瓦、埴の破片に混ざって出土した。

第10図	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
寸	2寸5分	5寸	4寸	3寸	2寸5分	2寸	1寸8分	1寸5分	1寸2分	1寸
現存長(cm)	7.2	14.3	12.3	9	6.8	6	5.4	4.9	3.8	3.3
現存重量(g)	19.4	40.7	25.2	16.2	3.7	4	3.3	3.1	1.5	1.1

10. 礎石

正方形状と円柱状の2種類がある。

正方形状のものは礎盤と称しているもので長さが40～50cm前後で、厚さは25cm前後である。石質は微粒砂岩で、色調は灰色を呈する。上面及び側面は平坦に成形しているが、裏面は打ち欠いた状態のままである。

円柱状のものは側面はくびれており、上面中央部には直径6.5cm、深さ5cmの穴がくりぬかれている。大きさは直径約40cm、高さが18cm。石質は微粒砂岩のものと角閃花崗岩(みかげ)のものがある。

第V章 ま と め

今回の発掘調査は、崇元寺の遺構の保存状況を確認する目的で実施されたものである。その結果、第IV章1でも述べている通り、戦災及び諸工事で破壊を受けたものの基礎部分は十分に復元可能なほどに、保存されていることが明らかになった。ところで崇元寺の建造物の配置を知る古い文献として『中山伝信録』(注1)、新しくは戦前の写真、平面実測を記した『琉球建築』(注2)があり、前者の図からすると建造物は7基、後者は6基とその数や配置等に若干の違いがみられる。これは後年の増改築をものがたるものでもあり、今回の調査では遺構の重複も予想はしたが、戦前までの遺構のみで、それ以前のはみることが出来なかった。明らかにした遺構は正廟跡、東庁跡、西庁跡、前堂跡、およびそれらに附属する石畳道であるが、範囲確認調査の性格上、遺構の全容を露出させたものはないいずれも部分的なもので、その多くが本地域に埋没していることが知られた。比較的遺構の全体像をつかむことが出来た正廟跡は、南北中心軸がわずかに東に6°ずれて南面し対応する門(内面)は逆に西に6°ずれる様に配され、地軸を強く意識した正確な伽藍配置であることが判明した。

出土遺物は、攪乱を深部まで受け現代遺物の混入もみられたが、明らかに崇元寺に属するものとしては、青磁器、染付、磁器製コイン状製品、青銅器、古銭、埴、瓦、鉄製品(金具、釘)、礎石等がある。青磁器類等のいわゆる日常器はその出土量が微量を呈している。これは本遺跡が廟とする性格を示唆しているものと考えられる。古銭は正廟跡から一括して69枚検出されたもので、中国銭と日本銭が混在している。そこに集められた時期は今のところ最も新しい寛永通宝(1636年)が上限となり、それ以後になされたとして判断されよう。古銭に形状を同じくするものとして青磁片の加工品がある。これはすべて階段部分からの出土である。類例資料として今帰仁城跡(注3)、浦添城跡(注4)にみられ、玩具として報告されているが正廟跡での検出でもあり、冥銭的機能もうかがわれ、さらに他遺構内での検出をまって再考したい。

建造物に属するものとして多く得られたものでは、瓦、埴、釘等である。崇元寺に始めて瓦葺がなされたのは尚貞16年(1684年)(注5)とされ、その頃に明式造瓦法による青灰色瓦が造られている。となると図版11の1はその当時に属する可能性の高いものである。また赤色瓦で軒丸、平の瓦当部の草花文は、いずれもシャープな仕上りを有するものであり、後世にあっても優品が選択されたことがうかがえるが、なお赤色瓦には戦後に建てられた琉米文化会館等の屋根瓦も含まれている可能性も有り、その細分検討の必要がある。角釘はその種類とサイズは多様を示し、構築物が複雑、多様化していることを語るものであろう。以上、大雑把把握ながら、今回の調査により、崇元寺の基礎遺構及び出土遺物の性格の一斑を知る知見を得ることが出来たが、未調査地域が大部占めていて今後の研究進捗がまたれる。なお、本地域で掘削及び盛土等により諸開発工事がなされる場合は、文化財保護当局と十分な協議調整が必要である。

註1. 徐葆光「中山伝信録」訳者、原田 雄、昭和57年 東京

2. 田辺泰「琉球建築」

3. 今帰仁村教育委員会「今帰仁城跡」第1次発掘調査概報、昭和56年 沖縄

4. 浦添市教育委員会「今姿を見せる古琉球の浦添城跡」昭和58年 沖縄

5. 球陽研究会編「球陽」沖縄

崇元寺について

真栄平 房 敬

昭和15年から19年までの間に数回にわたり崇元寺廟の内に入る機会があったので記憶をたどり当時の崇元寺の配置と構造、特に前堂及び正廟の内部構造や壁画、祭祀、管理等について簡単に紹介することにする。現在する写真ではっきりわかる部分（田辺泰著〈琉球建築〉、鎌倉芳太郎著〈沖縄文化の遺宝〉の中の写真）についての説明は省略することにする。

〈琉球建築〉にある配置図のとおり南面する石造アーチ門をくぐると奥行約10m余の広場があり、その奥の地盤が高くなっているところに前堂があった。前堂の地盤は前の広場より約1.3m高くなり、土留の石積み布積みされている。この石積みのところの3ヶ所に前堂に上る石段が並列して設けられている。中央の石段と外囲いの中央の石造アーチ門をつなぐ歩道は地盤より約30cm程高くなり、磚（俗に敷瓦という）が敷かれ、国王、世子、その名代、冊封使の専用となっていた。

石段を上ると更に一段と高く石積みされた基壇上に前堂があった。前堂は丸柱の中国様式の建物で、外壁はすべて黒く塗られ、軒下は磚敷きになっていた。前堂の内部は東と西よりそれぞれ2本の柱があるだけで広いホールになっていて、かつて冊封使が先王諭祭の礼を行ったあとの諭祭の宴が開かれたところであった。天井裏は化粧され、構造がそのまま見えるようになっていた。柱、小屋束、垂木などは赤く塗られていた。梁は白く塗られ、更に赤、緑、黒の3色で牡丹唐草文が描かれていた。白塗りの壁には墨絵の松竹梅、欄間には象牙や鹿の角の墨絵が描かれていた。床は全面磚敷きであった。正廟に向って開かれている前堂の木戸口の鴨居には〈肅容〉の2字が書かれた額が掲げられ、この木戸口を出ると正廟前の中庭が広がっていた。

この庭を四方からとりかこんで正面北側に正廟が前堂と相対して建ち、東西にはそれぞれ東庁、西庁が相対峙していた。この中庭の中央部を南北に磚敷きの歩道がつくられ、正廟と前堂をつないでいた。中庭の前堂より東側に梅、西側に桜が植えられ、正廟よりには東西2ヶ所にそれぞれ石で丸くかこまれた植込みがあり、その中に東に黒ツグ、西にソテツが植えられていた。中庭から正廟に上る5段の石段が3ヶ所に並列して設けられ、中央の石段は幅が広く、磚敷きの歩道に直結していた。

正廟は中国様式の建物で、まわりの地盤より1m程高く堅固に石積み（布積み）された基壇の上に建てられ、軒下は磚敷きであった。

この建物の内部は天井、梁、壁、柱に至るまで全面彩色装飾の施されている沖縄唯一の建物であった。建物の中央部に四角に対峙する4本の丸柱が立ち、北側の2本は祭壇の前柱になっていた。それらの柱は赤く塗られ、金箔の巻竜が描かれていた。北側2本の柱を横につなぐ線から奥の方は祭壇となり、祭壇は2本の柱によって3つに分けられていた。この2本の柱と東西の壁の柱をつなぐ梁には3つに分れた祭壇毎に鱗緞もつたんの几帳がとりつけられていた。中央祭壇は幅が広く、背後の壁には蓮花、左右の祭壇の壁には桃が描かれていた。歴代国王の神位は壁に厚さ7~8cm、幅約45cmぐらいの長い厚板が2枚重なって（下側のものは少し引込ませて）横に長く固定された上に安置されていた。正中に天孫氏25紀神位を安置し、その左右に昭穆の制に従って歴代国王の神位が安置

され、左右両端近くには金花・竜蟬燭の彫刻飾りがそれぞれ1対飾られていた。几帳の外の東西の内壁にも国王の祭壇とコの字型になるようにして祭壇が設けられ、西側の壇には「歴代王妃靈次」と書かれた神主が東面して安置され、東側の壇には歴代王叔臣神主と歴代功臣靈位が安置されていた。中央祭壇前の几帳の外には朱塗唐卓が置かれ、卓のまわりは黄、赤の絹市の裙形飾りをまわしてあった。卓の上には銅製の三脚高香炉がおかれ、その左右には献茶の器が供えられていた。

天井は化粧垂木、化粧小屋組みの下部構造を顕わし、中央部打上天井になり、飛天、鳥身天女、雲竜、波浪鯨などが極彩色で描かれ、欄間には雲鶴、梁には牡丹唐草文が描かれ、垂木、小屋束は赤塗りされていた。

正面の中央祭壇の欄間に当る小屋組みの小壁には〈源遠流長〉と大書された縦約1m、横約3mの大扁額が掲げられ、その左右及びまわりの小壁にもいくつかの大きな扁額が掲げられていた。

床は全面磚が敷かれ、廟の東側面の南端に幅1mほどの片開きの出入口が設けられていた。

国王の控所である東庁は中国様式の建物で軒下は埴敷きされていた。この建物は昭和期には殆んど使用されず閉められたまゝになっていたが内部は土間になり、爬竜船の頭部竜飾りが放置されていたことだけが記憶に残っている。この竜頭は球陽の尚貞王30年の竜頭放置禁止の記事と関係があるかも知れない。

東庁の南側の軒下近くに石で四角にかこまれ石蓋をかぶせた焚字炉があった。

西庁は王妃の控所で和様式の角柱の建物で、建物内部の特色は中央部の部屋がまわりより一段と高くなり、前面と両側面の鴨居には御簾をかける金具が取り付けられていた。

西庁の北側、敷地の北西隅に神厨があった。祭祀の時の台所の役目をするところで床面の $\frac{1}{4}$ に当る北隅は土間になり、残りは板張りで、そこには長い高脚卓がおかれていた。

正廟の東に接近して庫理があった。庫理の建物内部は南側の表座敷と北側の裏座の2つに大別され、表は更に正廟よりに10畳敷の2間と6畳の1間に分けられ、中央10畳の間には仏壇が設けられ、木彫り無化粧の観音像が祭られていた。北側の裏座もいくつか仕切られ倉庫になっていた。

東庁の後のあたりの中石垣をこえて外囲いの石垣との間の広場に車井戸があった。

外囲いの石垣の西南隅に2坪ばかりの広さの物見台があり、側に大きな梯梧がはえていた。この物見の下の通りの西よりに下馬碑が建ち、東側の下馬碑と相對峙していた。

祭 祀

崇元寺の祭りは年2回、春の啓蟄と秋の白露の節に行われた。

祭りの日だけ崇元寺の中央の3つのアーチ門と西側のアーチ門が開けられた。普段は東側の小さいアーチ門だけがあげられる定めになっていた。

祭りは男性だけの祭と女性だけの祭りに分れ、男性の祭りは午前11時頃からはじまり、中国の釈奠様式に似ていた。主なる供物は山羊料理と帛とよぶ芭蕉布である。御名代(当時尚秀氏)が沈香(抹香)をたき、泡盛、ムラハクをあげて美拝する。その後帛を焚字炉で焼くようになっているが昭和期の祭りでは代りに紙を焼いた。祭りのあと庫理で直会をすまし、男性が全員中城御殿へ引き上げたあと、御内原の貴婦人方による祭祀が行われたがどんな祭りであったか明らかでない。

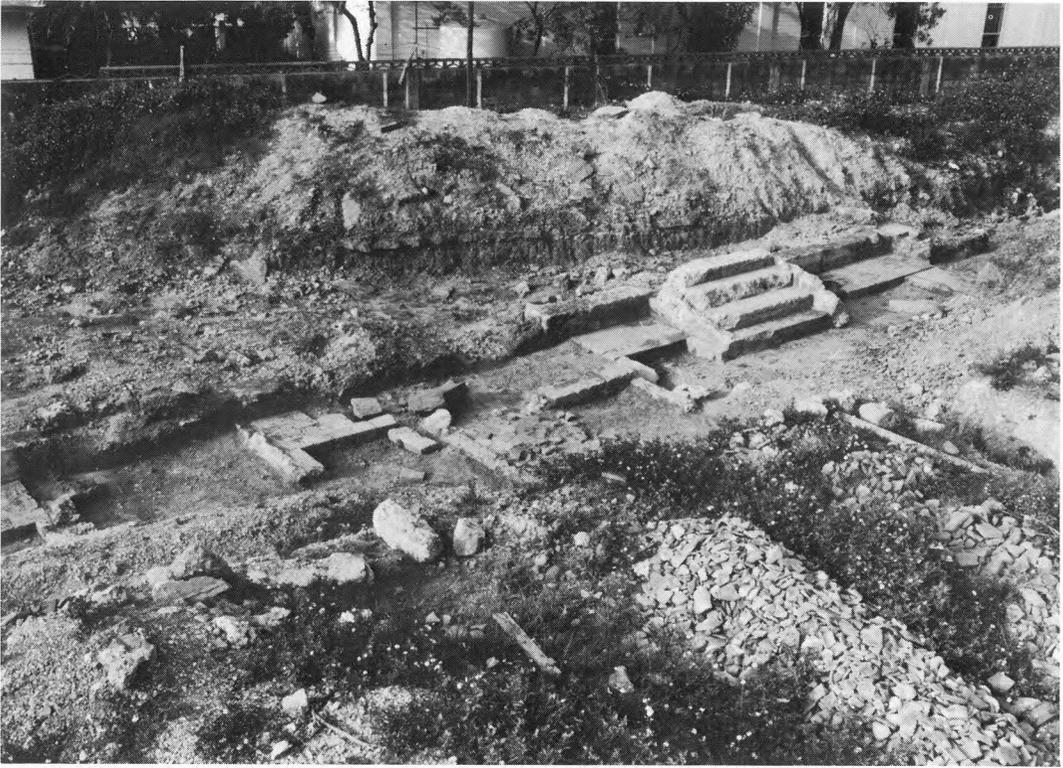
その日の女性は西側の小アーチ門から入り、西庁に控えるさだめになっていた。

管 理

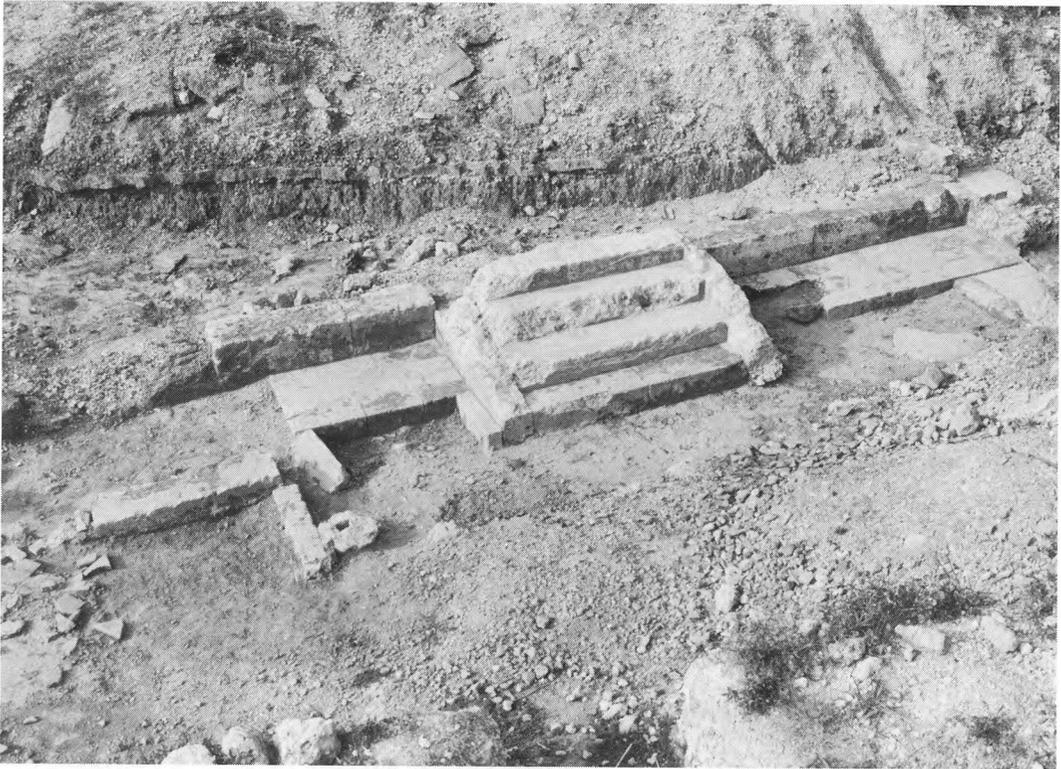
尚家では3乃至5年の限定で交替制で管理人を任じた。(満期したら「詰越願」というのを出して延長することもできた)。管理人はその家族と共に庫理に住み、主に域内の清掃や建物の維持状況等を報告した。管理人には管理料が支給された。戦前の管理人は平良良祥氏(明治11年生)であった。

正廟内部の管理

正廟内部は靈域として丁重に管理しなければならないので旧王族の中から厳選された方が管理した。戦前は大里朝直氏(尚悼大里王子の末子)が管理にあたり、毎月1日、15日の2回正廟を開扉し、祭壇を保清した。正廟の開扉は普通年2回の祭祀の日と毎月1日、15日だけでその他の日は尚家の特別なお参りが無い限り閉扉されていた。



正廟の正面



図版 5

正廟正面の東側の階段付近



正廟の西側

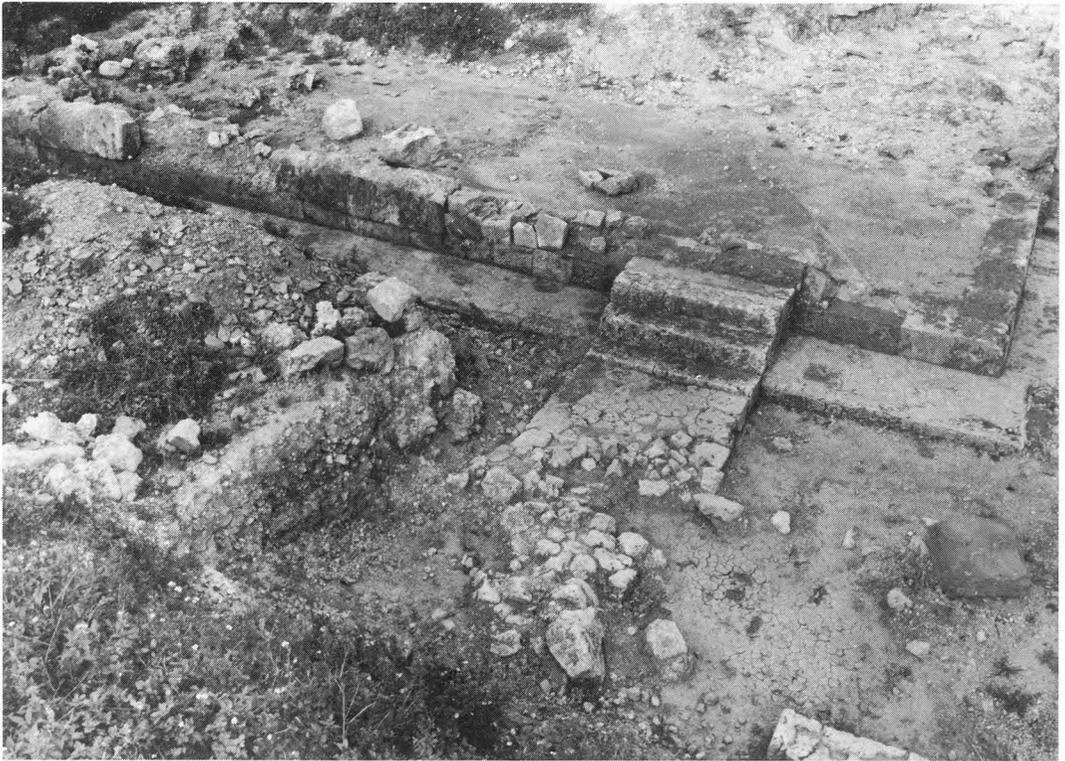


図版 6

正廟の正面中央階段付近



正廟南西隅



图版 7

正廟西側面



東庁東北隅付近の発掘



図版 8

東庁東北隅付近の発掘



前堂跡攪乱された状態で礎石が出土

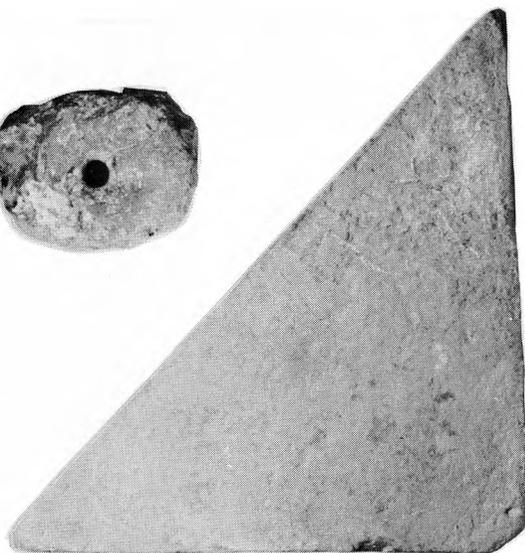
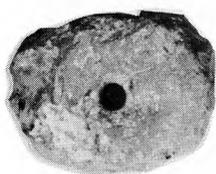
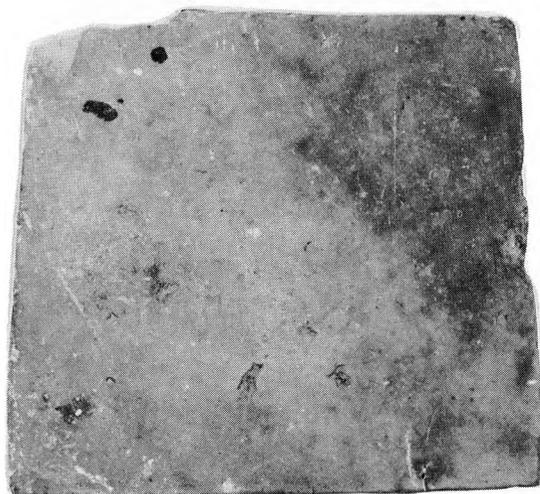


図版 9

礎石、礎盤



礎盤



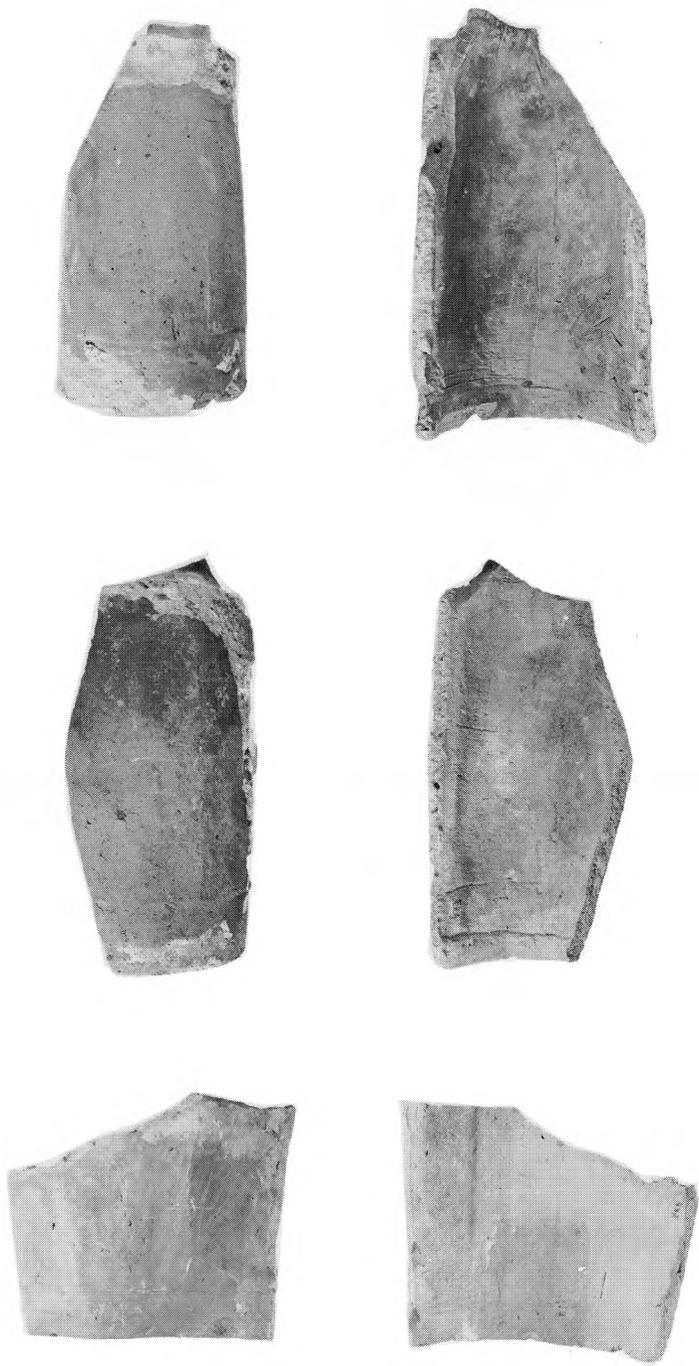
博



軒丸瓦 $\frac{1}{3} \frac{2}{4}$



垂尖形の軒平瓦 $\frac{5}{7} \frac{6}{8}$

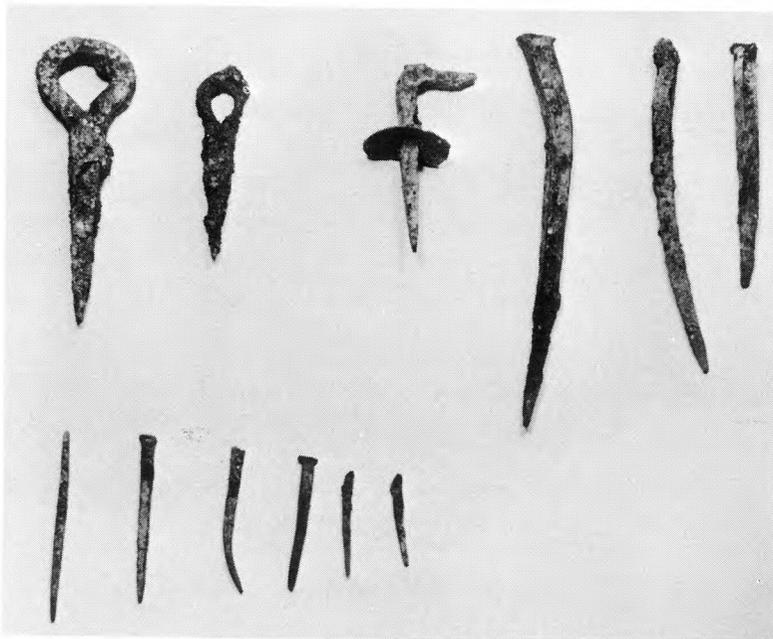


图版 12

瓦



瓦

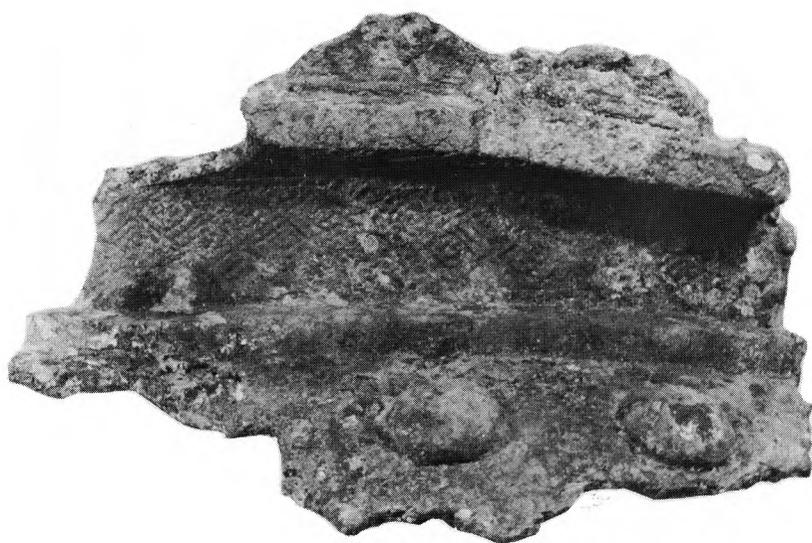


図版 13

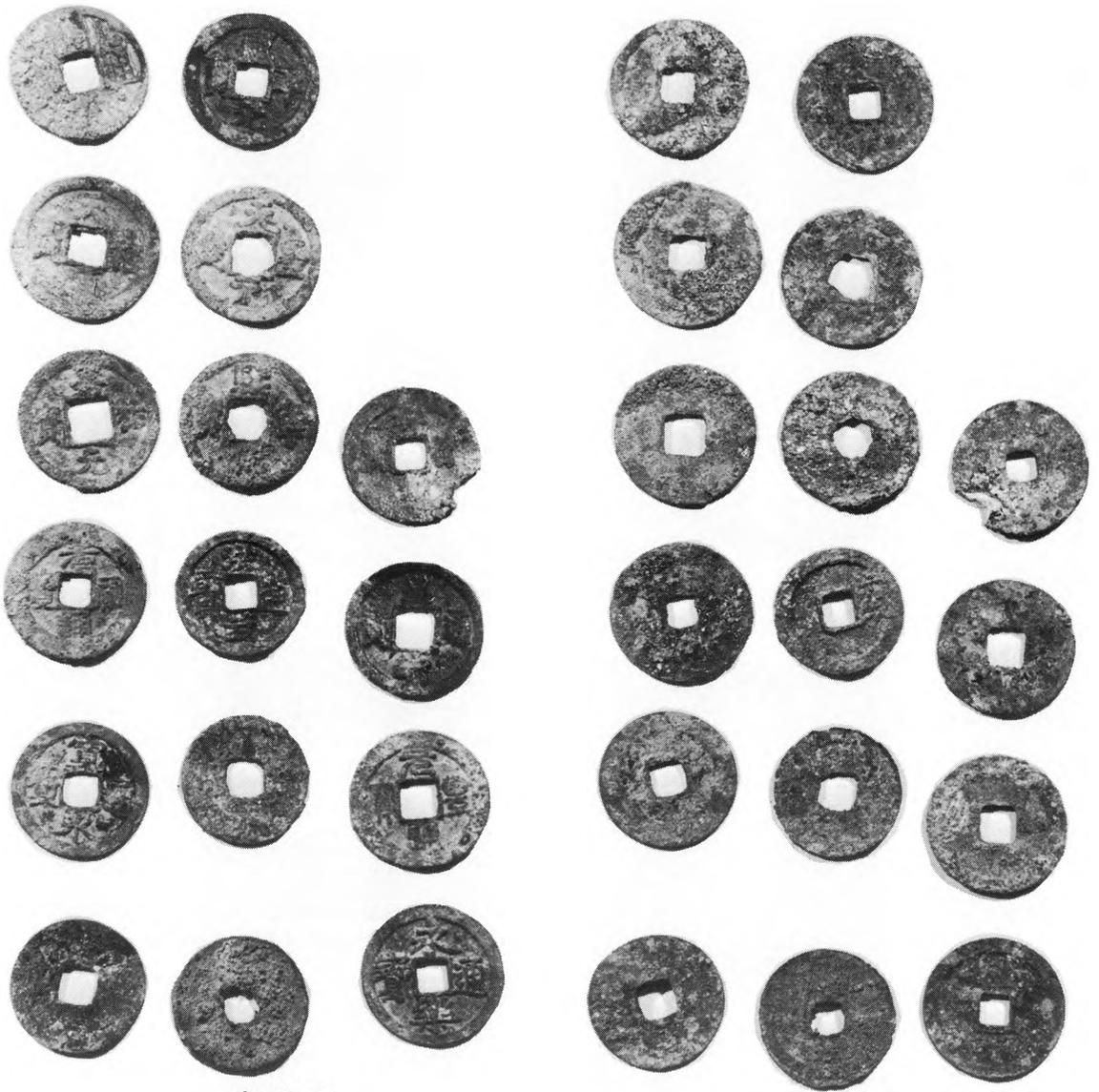
角釘と金具



金具類

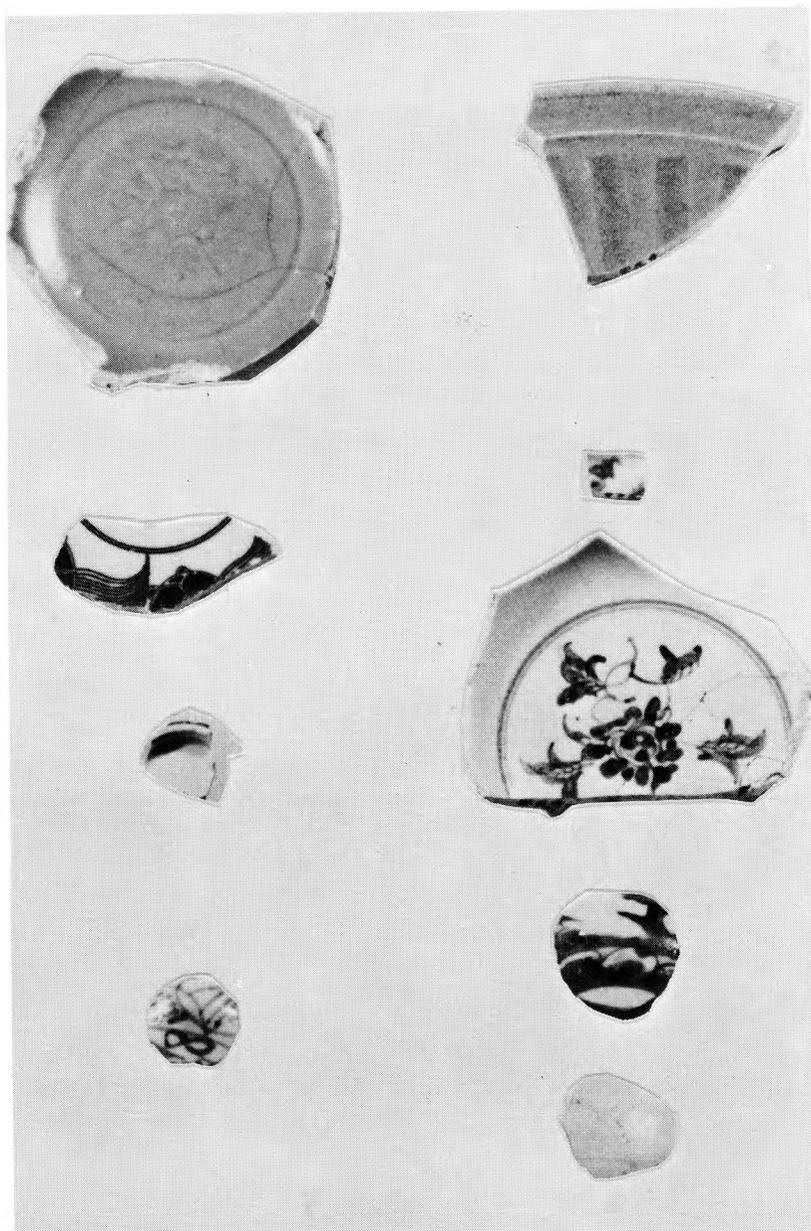


香炉の破片



古 錢 表

裏



磁器破片

那覇市文化財調査報告書第9集

崇 元 寺 跡

— 範囲確認発掘調査概報 —

昭和58年3月28日発行

編集者 沖縄県那覇市教育委員会社会教育課

発行者 沖縄県那覇市教育委員会
沖縄県那覇市樋川2丁目8番8号
TEL 0988 - 32 - 4166

印刷 平 山 印 刷

沖縄県那覇市寄宮1丁目12番-3号
TEL 0988 - 32 - 0177